

船橋市東中山台遺跡群第14次調査地点

－県単耐震橋梁緊急架換事業埋蔵文化財調査報告書－

平成12年3月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

ふな ばし し ひがし なか やま だい
船橋市東中山台遺跡群第14次調査地点

—県単耐震橋梁緊急架換事業埋蔵文化財調査報告書—



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第377集として、千葉県土木部の松戸原木線耐震橋梁緊急架換事業に伴って実施した船橋市東中山台遺跡群第14次調査地点の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良時代から平安時代にかけての集落が見つかるなど、この地域の原始・古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また、本地域の歴史を知るための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

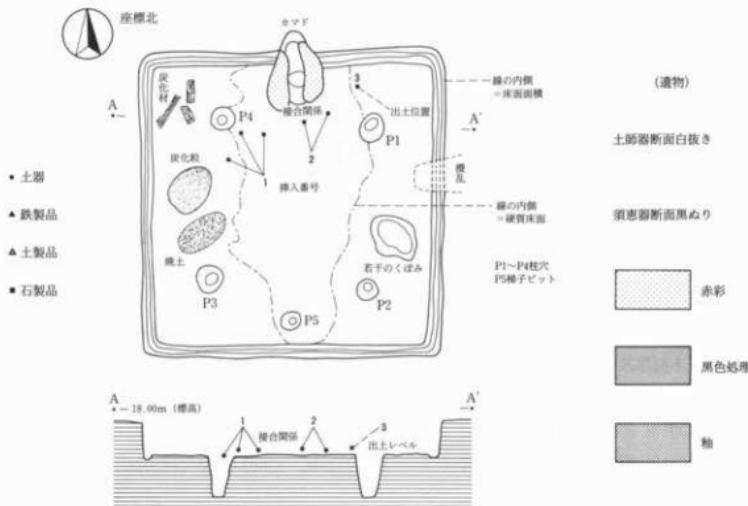
平成12年3月31日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

凡例

- 1 本書は、千葉県土木部による松戸原木線耐震橋梁緊急架換事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県船橋市西船6丁目73番地の1ほかに所在する東中山台遺跡群第14次調査地点（遺跡コード204-011）である。なお、本文中においては、東中山台遺跡群（14）と略称した。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、千代田調査室長 岸本雅人が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部、船橋市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第3図 國土地理院発行 1/25,000地形図「船橋」(NI-54-25-2-2)
第4図 船橋市役所発行 1/2,500都市計画図「船橋市26」
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。（写真縮尺1/10,000）
- 9 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。
- 10 本書で呼称した遺構番号は、調査時の番号と同一である。
- 11 挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、次のとおりである。



本文目次

序文

凡例

Iはじめに.....	1
1 調査の概要.....	1
(1) 調査の経緯.....	1
(2) 調査の方法.....	1
2 遺跡の位置と環境.....	2
(1) 遺跡の位置.....	2
(2) 遺跡の環境.....	4
II検出された遺構と遺物.....	7
1 概要.....	7
2 基本層序.....	7
3 穫穴住居跡.....	9
4 土坑.....	38
5 一括出土遺物.....	40
IIIまとめ.....	42
1 検出遺構について.....	42
2 出土遺物について.....	43
3 まとめ.....	44
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 グリッド配置図.....	1	出土遺物実測図①.....	12
第2図 下層確認グリッド配置図.....	2	第10図 SI001号 穫穴住居跡	
第3図 東中山台遺跡群周辺遺跡位置図.....	3	出土遺物実測図②.....	13
第4図 東中山台遺跡群調査地点図.....	5	第11図 SI002号 穫穴住居跡実測図.....	14
第5図 基本層序及びグリッド図.....	7	第12図 SI002号 穫穴住居跡出土遺物実測図.....	14
第6図 東中山台遺跡群(14)遺構配置図.....	8	第13図 SI003号 穫穴住居跡実測図.....	15
第7図 SI001号 穫穴住居跡実測図.....	9	第14図 SI003号 穫穴住居跡カマド実測図.....	16
第8図 SI001号 穫穴住居跡カマド実測図.....	10	第15図 SI003号 穫穴住居跡	
第9図 SI001号 穫穴住居跡		出土遺物実測図.....	17

第16図	SI004・SI005号 竪穴住居跡実測図	19	第27図	SI008号 竪穴住居跡実測図	29
第17図	SI004号 竪穴住居跡		第28図	SI008号 竪穴住居跡カマド実測図	30
	出土遺物実測図	19	第29図	SI008号 竪穴住居跡	
第18図	SI005号 竪穴住居跡			出土遺物実測図①	31
	出土遺物実測図	19	第30図	SI008号 竪穴住居跡	
第19図	SI006号 竪穴住居跡実測図	20		出土遺物実測図②	32
第20図	SI006号 竪穴住居跡		第31図	SI009号 竪穴住居跡実測図	34
	出土遺物実測図①	21	第32図	SI009号 竪穴住居跡カマド実測図	34
第21図	SI006号 竪穴住居跡		第33図	SI009号 竪穴住居跡	
	出土遺物実測図②	22		出土遺物実測図	35
第22図	SI007号 竪穴住居跡実測図	24	第34図	SI010号 竪穴住居跡実測図	37
第23図	SI007号 竪穴住居跡カマド実測図	25	第35図	SI010号 竪穴住居跡	
第24図	SI007号 竪穴住居跡			出土遺物実測図	37
	出土遺物実測図①	26	第36図	SK001・002・003・004号	
第25図	SI007号 竪穴住居跡			土坑実測図	39
	出土遺物実測図②	27	第37図	SK003号 土坑出土遺物実測図	39
第26図	SI007号 竪穴住居跡		第38図	一括出土遺物実測図	41
	出土遺物実測図③	28			

図版目次

図版 1	周辺地形航空写真	図版 5	1. SI006号竪穴住居跡
図版 2	1. 遺跡北側完掘状況（南西から）		遺物出土状況（南東から）
	2. 遺跡南西側完掘状況（南東から）	2. SI006号竪穴住居跡完掘（南から）	
図版 3	1. SI001号竪穴住居跡	3. SI007号竪穴住居跡	
	遺物出土状況（南から）	遺物出土状況（南東から）	
	2. SI001号竪穴住居跡完掘（南西から）	図版 6	1. SI007号竪穴住居跡完掘（南東から）
	3. SI002号竪穴住居跡	2. SI008・SI009号竪穴住居跡	
	遺物出土状況（西から）	遺物出土状況（南西から）	
図版 4	1. SI003・SI010号竪穴住居跡	3. SI008号竪穴住居跡	
	遺物出土状況（北西から）		
	2. SI003・SI010号竪穴住居跡	図版 7	1. SI008・SI009号竪穴住居跡
	完掘（北西から）		完掘（南西から）
	3. SI004・SI005号竪穴住居跡	2. SK001号土坑完掘（北東から）	
	完掘（北西から）	3. SK002号土坑完掘（南から）	

図版8 1. SK003号土坑完掘（北から）

2. SI004号土坑完掘（北から）

図版9 SI001・SI002出土遺物

図版10 SI003・SI004・SI005・SI006出土遺物

図版11 SI006・SI007出土遺物

図版12 SI007・SI008出土遺物

図版13 SI008・SI009・一括出土遺物・

布目瓦・敲石

図版14 敲石・石皿・軽石・土製品・

ナイフ形石器・鉄製品①

図版15 鉄製品②

I はじめに

1 調査の概要

(1) 調査の経緯

千葉県土木部道路建設課は、船橋市西船6丁目にある県道松戸原木線が京成電鉄をまたぐ高架橋を耐震構造の橋梁に緊急に架け替える工事を計画した。これは、県道松戸原木線の交通量が多く、工事期間中通行止めとすることができないため、耐震橋梁工事に先行して西側に迂回路をつくり、橋梁工事期間中迂回させる必要が生じたためである。この迂回路建設部分は東中山台遺跡群として周知の遺跡であり、その範囲は京成電鉄の線路を挟んで北側と南側に及んでいる。埋蔵文化財の取扱いについては、事業者と千葉県教育庁生涯学習部文化課との間で慎重な協議が重ねられた結果、若干標高の低い南側は盛土をして迂回路建設工事を行い、現状保存されることになった。しかし、現状保存の困難な北側部分については、記録保存の措置を講ずることとなり、当センターが調査を実施することとなった。

発掘調査は、対象面積1,452m²の確認・本調査で、平成10年4月1日から平成10年5月29日までの期間に実施された。調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡10軒と土坑4基の遺構とともに、該期の遺物が検出された。整理作業は平成11年度に実施され、報告書刊行の運びとなった。

発掘調査及び整理作業は、北部調査事務所長 折原繁の指導のもと、下記の職員が担当した。

平成10年度 平成10年4月1日～平成10年5月29日

(発掘調査 確認・本調査) 研究員 花島理典

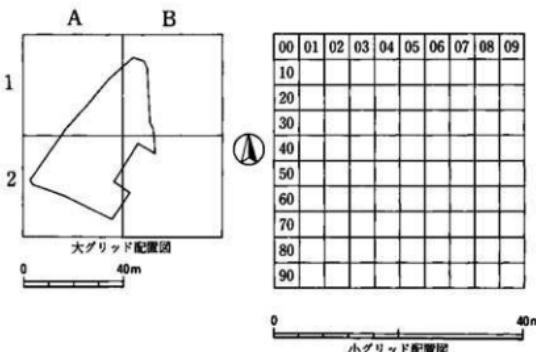
平成11年度 平成11年4月1日～平成11年6月30日

(整理作業 水洗・注記～原稿執筆、刊行) 室長 岸本雅人

(2) 調査の方法(第1, 2図)

本遺跡は東中山台遺跡群として周知されている遺跡であり、船橋市教育委員会及び財団法人船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター等で、継続的に発掘調査が行われている。このため、本遺跡の調査方法も船橋市に準じる方法をとった。

発掘区の設定は、国土地理院国家座標第IX系を基準とし、40m×40m方眼の大グリッドを西から東に向かってA、B、北から南に向かって1、2に区画し、1A区～2B区の4区の大グリッド内を4m×4m方眼の小グリッドに分割し、西から東へ00～09、



第1図 グリッド配置図

北から南に向かって00~90とした。したがって、各々の小グリッドは1A-56, 2B-35のようになる。2B-00の基準杭は、北緯35度42分39秒、東経139度57分31秒である。

各遺構の位置や遺構に伴わない遺物については、小グリッドで示した。また、遺構の番号は、遺構の種別ごとに略号を設け、通し番号を付した。略号は次のとおりである。

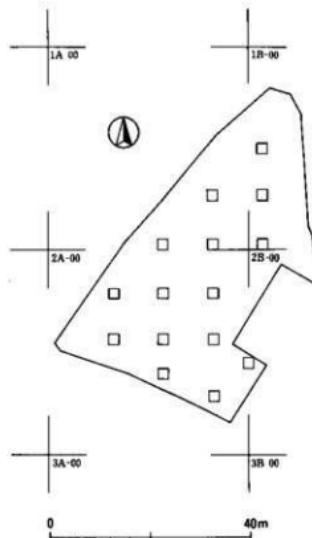
SI 穫穴住居跡 SK 土坑

上層確認調査は調査区域に2m幅のトレンチを南北に等間隔に5本設定し、1,452m²の内325m²を確認した。しかし、調査区の中央部から北部では、1m以上の砂の客土が約800m²ほどの範囲に確認され、さらに、深さ2m以上の擾乱が隨所にあり、遺構の確認が困難な箇所が多かった。なお、調査区南部でトレンチ内で検出した土坑については周囲に遺構の広がりが確認されなかったので、確認の範囲内で終了させた。したがって、調査区北部と南西部の竪穴住居跡を検出した範囲が本調査範囲となった。

下層確認調査は調査区全域2m×2mの調査坑を対象面積の4%設定したが、遺物の出土は確認されなかった。

$$1B-00 X = -32040.000 Y = 11340.000$$

$$2B-00 X = -32060.000 Y = 11340.000$$



第2図 下層確認グリッド配置図

2 遺跡の位置と環境

(1) 遺跡の位置(第3図)

東中山台遺跡群(14)(以下「本遺跡」とする)は船橋市西船6丁目73番地の1ほかに所在し、船橋市が継続して発掘調査を行っている東中山台遺跡群内に位置する。東中山台遺跡群(以下「本遺跡群」とする)は西側に大柏谷の支谷、東側に古作谷が入る下総台地上に位置し、標高は16m~21mである。行政的には船橋市でも最西端部に位置し、市川市に接している。本遺跡群については、「(2) 遺跡の環境」で詳しく触れるので、ここでは周辺の遺跡について見ていくこととする。

本遺跡群と葛飾川が形成する古作谷を挟んだ東側の台地上には、印内台遺跡群が展開する。この印内台遺跡群内には印内遺跡が所在し、武藏野線工事に伴う事前調査や、寮建設などの工事に伴う事前調査によって古墳時代から奈良時代、平安時代にわたる大集落が確認されている。遺構としては、竪穴住居跡124軒(古墳時代16、奈良時代56、平安時代52)や十数棟を数える掘立柱建物跡などが検出された。遺物としては、土師器、須恵器、金属器などが多量に出土した。これらの状況は、本遺跡の内容と非常に類似しており、本遺跡を語る上で重要な遺跡と言える。また、印内台遺跡群内には、東前貝塚、上ボチ貝塚、御日の前貝塚、権現台貝塚、竹の内貝塚、押堀貝塚、境海道貝塚などの多くの貝塚が点在する。



1. 東中山台遺跡群 (14) 2. 東中山台遺跡群 3. 印内台遺跡群 4. 海神台西遺跡 5. 飛ノ台貝塚 6. 駒形前貝塚 7. 山野古墳
 8. 海神古墳 9. 宝塚道路 10. 大宮越遺跡 11. 中山法華經寺境内遺跡 12. 第六天前遺跡 13. 若宮城跡 14. 若宮八幡遺跡
 15. 古作貝塚 16. 内道跡 17. 古作中台遺跡 18. 前貝塚込古作貝塚 19. 北本町二丁目遺跡 20. 美濃輪台遺跡 21. 花ヶ谷台遺跡
 22. 東新山遺跡 23. 南七吹畠遺跡

第3図 東中山台遺跡群周辺遺跡位置図 (1/25,000)

これらの貝塚は、主体となる貝種がハマグリやカキで、そのほとんどが奈良時代から平安時代に比定されている。この印内台遺跡群は、船橋市により継続的に発掘調査が行われ、現在までに28地点が調査されている¹⁾。

印内台遺跡群の東側には、海神台西遺跡が位置し、昭和56, 57, 59, 60年と平成7年に発掘調査が行われている。平成7年度に行われた第9次調査地点では、9世紀前葉から9世紀中葉の竪穴住居跡が検出されている²⁾。さらに東側には、縄文時代早期の大貝塚である飛ノ台貝塚が位置し、平成1, 2, 3年にわたり発掘調査が行われている。遺構としては早期の竪穴住居跡、炉穴などが検出され、貴重な資料を提供した³⁾。一方、本遺跡群の西側は浅い谷を隔てて市川市となり、中山法華經寺が位置する。さらに西側には、平成5, 7年に一部が発掘調査され、奈良・平安時代の集落跡であることが確認された大宮越遺跡が位置する。

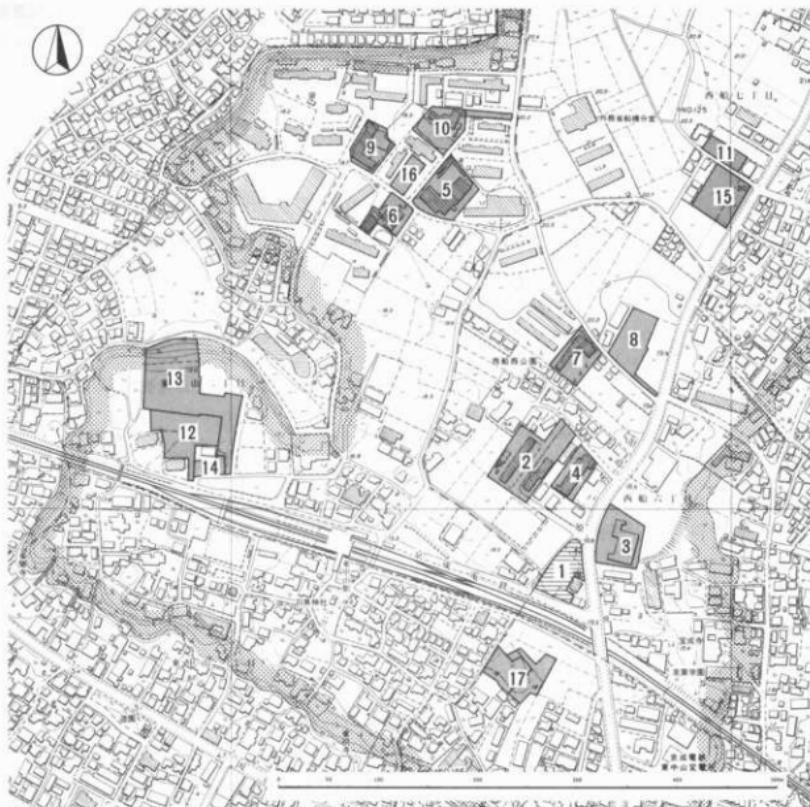
また、本遺跡群の北側には、昭和54年と平成7年に一部が発掘調査され、古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落跡であることが確認された若宮八幡遺跡が位置する。さらに北側には、昭和62年に発掘調査された、縄文時代中期から晩期の貝塚、集落跡である古作貝塚が位置する⁴⁾。

(2) 遺跡の環境（第4図）

本遺跡群は、東京湾に臨む下総台地上に位置し、西側を大柏川の支流、東側を葛飾川によって開析されている。また、本遺跡群内のやや東寄りを県道松戸原木線がほぼ南北に縦断し、すぐ北側には中山競馬場がある。今回の調査地点は、本遺跡群内の南側に当たり、京成電鉄東中山駅より東に直線距離約200mに位置する。東側は県道松戸原木線、すぐ南側は京成電鉄の線路が通っている。標高は約18mである。

本遺跡群は、過去の発掘調査では、「東中山台遺跡」と「本郷台遺跡」の2種類の遺跡名称が与えられてきたが、現在は「東中山台遺跡群」に統一されている。「東中山台遺跡群」としての発掘調査はこれまでに第13次調査まで行われている。したがって本遺跡の調査が第14次となる。また、本郷台遺跡としての発掘調査は昭和52年12月から昭和53年2月にわたって行われた本郷台遺跡第1次調査が始まる。これまでに本郷台遺跡第7次調査までの発掘調査が行われている。一方、遺跡の名称は別として、本遺跡群において確認及び本調査が行われた箇所は、本遺跡を含めると今までに17地点となる。ここでは「第4図 東中山台遺跡群調査地点図」を参考に、これまでの発掘調査の経過と成果をまとめてみることにする。

2は本郷台遺跡第1次調査地点で、本遺跡群での最初の本格的な調査である。遺構としては7世紀後葉から11世紀の竪穴住居跡16軒、奈良時代の掘立柱建物跡15棟、溝状遺構4条、木棺墓1基、土坑墓4基、火葬墓3基、馬葬壙1基などが検出されている。遺物としては土師器、須恵器（東海産、下総産、上総産）、灰釉陶器、鉄製品（鋤先、鎌、刀子、鐵、釘、紡錘車、環状金具、U字形金具）、石製品（紡錘車、砥石、匙）などが出土している。特筆すべきものとして土師器の杯又は皿に書かれた墨書き土器が224点も出土していることが上げられる⁹。3は本郷台遺跡第2次調査地点で、昭和58年2月から同年3月にわたって発掘調査が行われた。遺構としては8世紀中葉から10世紀の竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡2棟、溝状遺構3条、小竪穴4基、火葬墓2基が検出されている。遺物は土師器、須恵器、鉄製品（刀子、鎌、槍鉋、釘、鎌）、石製品（紡錘車、砥石）が出土しており、やはり墨書き土器が多いことが特筆される¹⁰。本郷台遺跡の発掘調査は、上記以降第3次調査から第7次調査まで行われているが、主に8世紀から10世紀を中心とする竪穴住居跡、掘立柱建物跡、製鉄工房跡、道路跡、土坑などが検出されている。それ以外にも7世紀後葉の竪穴住居跡や中世の溝状遺構、馬葬壙、方形竪穴状遺構などが、少數であるが検出されている¹¹。5、6、7、8は、それぞれ本遺跡群第1次、3次、5次、6次確認調査地点に該当するが、本調査時は本郷台遺跡の名称が付され、それぞれ本郷台遺跡第4次、5次、6次、7次の名称で本調査が行われた（このため「東中山台遺跡群」第1次、3次、5次、6次、7次確認調査は第4図中では欠番になっている）。9は本遺跡群第2次確認調査地点で、平成3年9月に確認調査が行われた。擾乱が著しく遺構の確認はできなかつたが、擾乱層中に破碎貝や少量の土師器などを含んでおり、貝塚の存在の可能性があったと思われる¹²。10は本遺跡群第4次確認調査地点で、平成4年7月に確認調査が行われた。8世紀から9世紀の竪穴住居跡9軒、土坑9基が検出されている¹³。11は本遺跡群第7次確認調査地点で、平成6年12月に確認調査が行われた。遺構の遺存状態は良くないが、8世紀から9世紀の竪穴住居跡4軒、溝状遺構2条が検出されている¹⁴。12は本遺跡群第8次、9次調査地点で、平成7年7月に確認調査を行い、平成8年1月から同年5月にわたって本調査が行われた。同一地点で年度をまたがった調査が実施されたため、平成7年度調査分を本遺跡群第8次調査とし、平成8年度調査分を本遺跡群第9次調査としている。遺構としては8世紀の竪穴住居跡1軒、中世後半の台地整形区画9か所、近世の地下式壙13基、土坑116基、溝状遺構40条、竪穴遺構2基、ピット153基、地下式土坑1基がそれぞれ検出されている¹⁵。13は本遺跡群第10次調査地点で、平成9年に



1. 東中山台遺跡群第14次調査地点 2. 本郷台遺跡第1次調査地点 3. 本郷台道路第2次調査地点 4. 本郷台道路第3次調査地点 5. 本郷台道路第4次調査地点 6. 本郷台道路第5次調査地点 7. 本郷台道路第6次調査地点 8. 本郷台道路第7次調査地点 9. 東中山台遺跡群第2次調査地点 10. 東中山台遺跡群第4次調査地点 11. 東中山台遺跡群第7次調査地点 12. 東中山台遺跡群第8次・第9次調査地点 13. 東中山台遺跡群第10次調査地点 14. 東中山台遺跡群第10-2次調査地点 15. 東中山台遺跡群第11次調査地点 16. 東中山台遺跡群第12次調査地点 17. 東中山台遺跡群第13次調査地点

第4図 東中山台遺跡群調査地点図 (1/5,000)

確認・本調査が行われた。遺構としては竪穴住居跡16軒（縄文時代前期6、古墳時代後期3、奈良時代7）、奈良時代から中世の掘立柱建物跡14棟、中世の地下式壙4基、火葬墓1基、粘土貼土坑8基などが検出されている¹²⁾。14は本遺跡群第10-2調査地点で、平成9年4月に確認調査が行われた。遺構としては中世の台地整形大区画1か所、台地整形小区画3か所、土坑13基、粘土貼土坑11基、地下式壙2基、ピット6基、貝層3か所が検出されている。15は本遺跡群第11次調査地点で、平成9年7月に確認調査、同年10月から11月にわたり本調査が行われた。遺構としては8世紀から10世紀の竪穴住居跡14軒、土坑4基、中世の溝状

遺構6条、道路跡1条、馬糞壙1基、土坑墓1基、土坑13基が検出されている。16は本遺跡群第12次調査地点で、平成9年9月に確認調査、平成11年2月から4月にわたり本調査が行われた。遺構としては8世紀から10世紀の竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡21棟、土坑20基、竪穴状遺構1基、中世の台地整形区画1か所、土坑11基が検出されている¹³⁾。17は本遺跡群第13次調査地点で、平成9年11月から平成10年1月にわたり本調査が行われた。遺構としては竪穴住居跡21軒（古墳時代4、奈良時代～平安時代17）が検出されている¹⁴⁾。

本遺跡群でこれまでに調査された地点の遺構で特徴的なのは、奈良時代から平安時代、中世を中心とした竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、道路跡、貝層などが多く検出されていることである。また、遺物では墨書き器、鉄製品、中世陶器などが非常に多く出土している。

- 注1 勘船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター 1998『平成9年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』「印内台遺跡群(22)・(22-2)・(23)・(24)」船橋市教育委員会
- 2 勘船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター 1996『平成7年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』「海神台西遺跡(9)」船橋市教育委員会
- 3 飛ノ台貝塚発掘調査団 1978『飛ノ台貝塚発掘調査概報』
- 4 勘千葉県文化財センター 1998『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)』－東葛飾・印旛地区(改訂版)－平成9年5月
- 5 岡崎文喜他 1980『本郷台』本郷台遺跡発掘調査団
- 6 岡崎文喜他 1983『本郷台II』－奈良・平安時代を中心とした集落址の調査－船橋市遺跡調査会・本郷台遺跡第二次調査団
- 7 栗原薰子・道上文 1998『千葉県の歴史』資料編 考古3(奈良・平安時代)「129本郷台遺跡」財団法人千葉県史料研究財團
- 8 勘船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター 1992『平成3年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』「東中山台遺跡(第1・2・3次調査)」船橋市教育委員会
- 9 勘船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター 1993『平成4年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』「東中山台遺跡(第4次)」船橋市教育委員会
- 10 勘船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター 1995『平成6年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』「東中山台遺跡(第5次・第6次・第7次)」船橋市教育委員会
- 11 石坂雅樹・志村亨 1997『東中山台遺跡群(8・9)』埋蔵文化財センター調査報告書第3集 白井建設株式会社・財団法人船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター
- 12 勘船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センターより資料の提供を受けた。
- 13 勘船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター 1998『平成9年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』「東中山台遺跡(10-2)(11)(12)」船橋市教育委員会
- 14 勘船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センターから資料の提供を受けた。

II 検出された遺構と遺物

1 概要 (第6図)

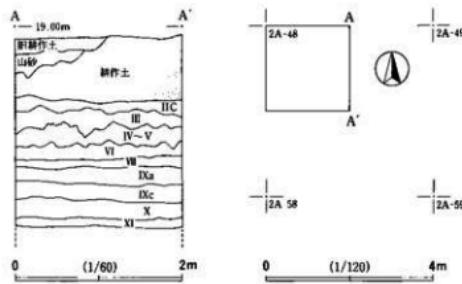
本遺跡は近年の擾乱が著しく、遺構の確認が困難な箇所が多かった。特に中央から北側にかけては、砂の客土が広範囲に堆積し、深い所では深さ2m以上あった。中央部分と南側は確認調査の結果、完全に破壊されていたため、本調査範囲から除外した。調査区域内は近年の擾乱を受ける前は耕作地だったようで、かろうじて近年の擾乱を受けなかった箇所も、耕作による天地返しを受けている部分が随所に見られ、層位ではIIc層上面にまで達していた。また、地中には埋設ケーブルなどがあり、本調査範囲もかなり限定された。このような状況のため、遺構の遺存状態はあまり良くなく、完全な状態での遺構の検出は皆無であった。出土遺物としては、このように擾乱が著しいため、遺構内出土土器も小破片のものが多く、図示できた土器は少ない。遺構の覆土中には擾乱により再堆積した遺物も多く、また、遺物が少なく時期区分できない遺構もあり、遺構の時期区分は大まかな区分を用いらざるを得なかった。ここでは、国示できた土器は遺構内出土のものについては極力掲載したが、遺構の時期区分については、カマド、床面出土の土器を基準とした。

本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡10軒、土坑4基である。そのうち、竪穴住居跡の時期は奈良時代が4軒、平安時代が6軒、土坑4基はすべて平安時代にそれぞれ比定できる。竪穴住居跡は本遺跡北側でSI001, SI002, SI003, SI004, SI005, SI008, SI009, SI010の8軒、南西側でSI006, SI007の2軒が検出された。北側の竪穴住居跡8軒中SI002の1軒のみが重複がみられず、他はそれぞれ他の竪穴住居跡と切り合い関係にある。北側では、SI001, SI008の2軒が奈良時代に、SI002, SI003, SI004, SI005, SI009, SI010の6軒が平安時代にそれぞれ比定できる。また、南西側の竪穴住居跡SI006, SI007の2軒は奈良時代に比定できる。

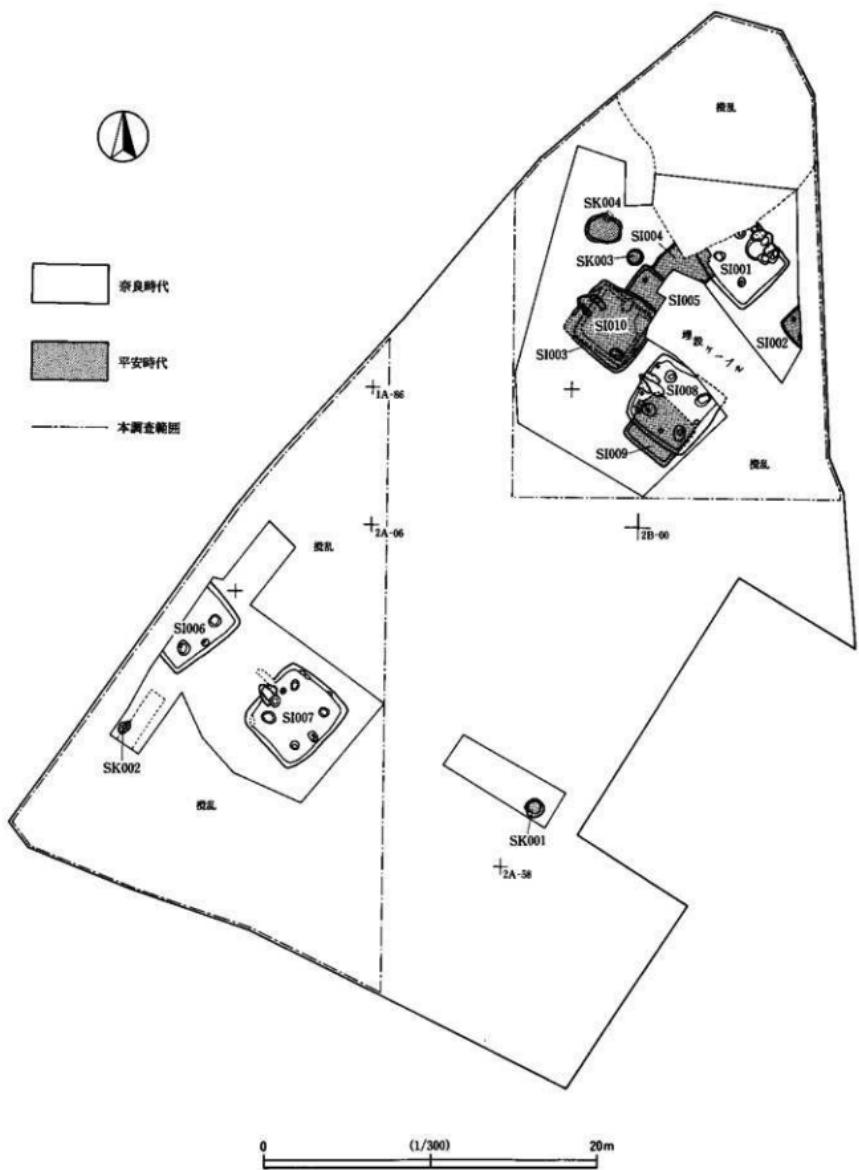
土器は土師器の甕に搬入品が比較的多く、土器以外の出土遺物としては、鉄製品が多いのが本遺跡の特徴である。

2 基本層序 (第5図)

前述のとおり本遺跡は近年の擾乱が著しく、IIc層上面にまで達していた(網掛部分)。III層は黄褐色軟質ローム(ソフトローム層)で、黄褐色硬質ローム(ハードローム層)であるIV~V層との境界線は風化が顕著で、IV層とV層の明確な分層はできなかった。第5図ではIV~V層としてあるが、主体はV層である。旧石器時代の遺物としては、ナイフ形石器が出土しているが、産出層準は不明である。(IIの5-1括出土遺物12参照)。



第5図 基本層序及びグリッド図



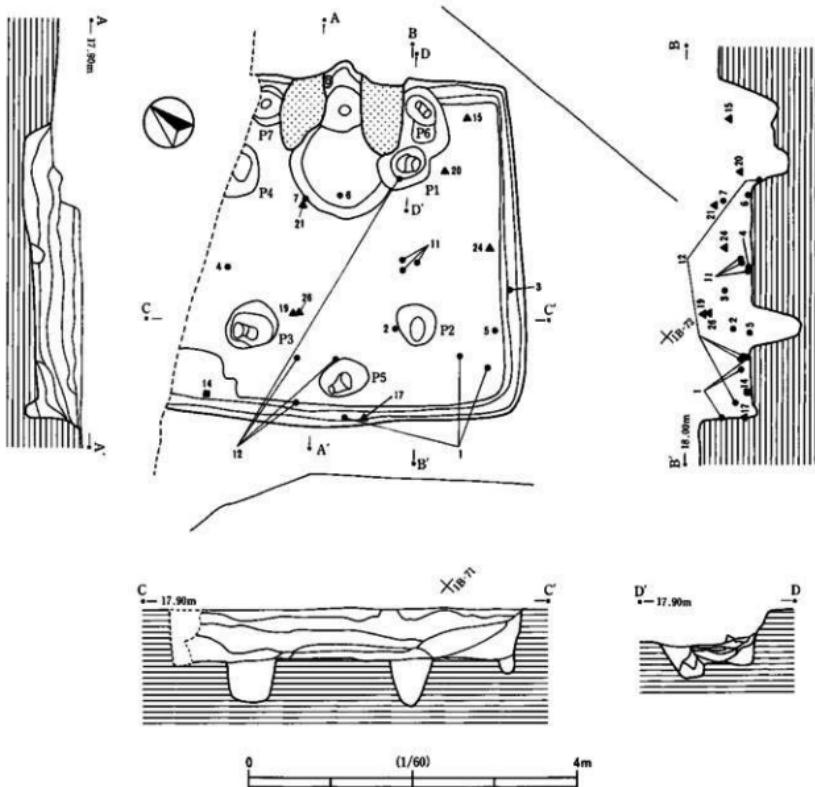
第6図 東中山台遺跡群(14)遺構配置図

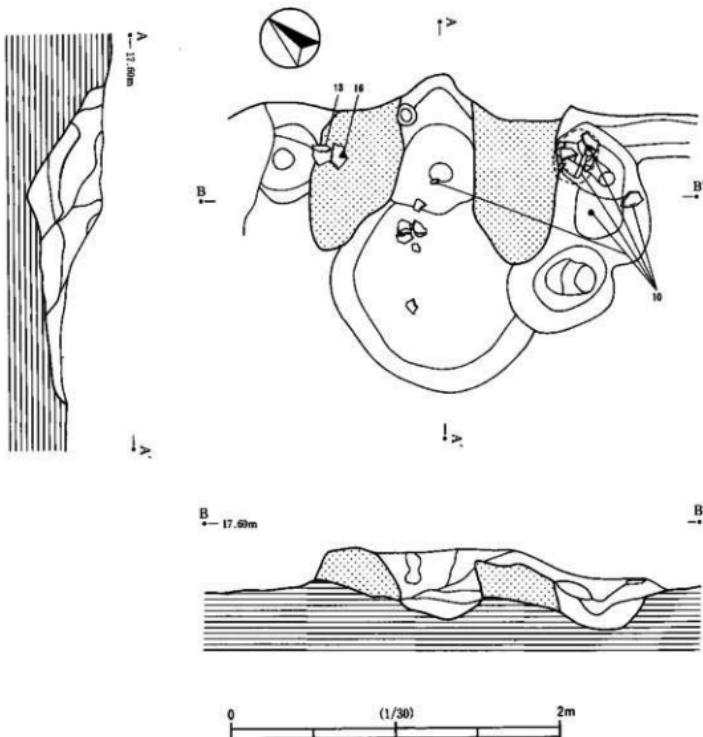
3 壺穴住居跡

SI001 (第7~10図、図版2-1, 3-1, 2, 9, 13~15)

位置・形状

1B-61に位置し、SI004に南西側の壁と床面を切られている。北西壁は近年の擾乱のため破壊されている。平面形態は方形で、長軸4.36m、短軸（推定）4.30m、住居方位はN-51.5°-Eである。また、確認面から床面までの深さは他の壺穴住居跡に比較すると最も深く、最大深66.8cm、最小深44.4cmである。北西壁から床面の一部が破壊されているために、壁溝が全周するかどうかは不明である。床面には硬化した面は特に認められなかった。柱穴はしっかりとしきりたものが4基（P1, P2, P3, P4）検出され、カマド対壁直下の床面には梯子ピット（P5）が、カマド両袖脇にはきれいに整形された2基の貯蔵穴（P6, P7）がそれぞれ検出された。深さはP1=49.5cm, P2=60.7cm, P3=69.0cm, P4=59.8cm, P5=24.1cm, P6=38.0cm, P7=39.8cmを測る。カマドは崩壊が著しく、周辺にカマド構築材が散乱していた。また、カマド焚き口部前面には径1.2mの円形の掘込みが確認された。





第8図 SI001号 穴住居跡カマド実測図

出土遺物

覆土中からは多量の土器片が出土したが、その大部分が小片で復元不能であった。図示できた遺物は、須恵器の杯4点、高台付杯1点、土師器の杯3点、高台付杯1点、甕4点、敲石1点、鉄製品12点の計26点である。

1～4は須恵器の杯である。1は口縁部から体部の一部を欠損するのみで遺存はよい。口径13.8cm、底径8.4cm、器高3.5cm、胎土は密で焼成も良好である。体部の輪轂成形痕が明瞭で、口縁部が外反して立ち上がる。底部外面は回転糸切りの後、回転ヘラケズリが外周部分から体部下端部まで施される。2は口縁部から底部までの1/2ほど復元できた。復元口径13.3cm、復元底径8.4cm、器高4.5cm、胎土は密で焼成も良好である。体部の輪轂成形痕が明瞭で口縁部が外反して立ち上がる。底部外面は回転ヘラ切りの後、手持ちヘラケズリが全面に施される。3は口縁部から底部までの1/3ほど復元できた。復元口径13.6cm、復元底径8.3cm、器高3.6cm、胎土は密で焼成も良好である。体部の外面は、輪轂成形痕が明瞭で、内面は回転ナデが施され、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。底部外面は手持ちヘラケズリが施され、切離し技法は

不明である。4は口縁部から底部までの1/3の破片である。復元口径14.3cm、復元底径8.4cm、器高4.3cm、胎土は密で焼成も良好である。体部の輪轂形成痕が明瞭で、口縁部が外反して立ち上がる。底部外面は手持ちヘラケズリが全面及び体部下端部まで施され、切離し技法は不明である。

5は須恵器の高台付杯で、口縁部から高台までの1/3ほど復元できた。高台は削り出して作られており、底部内面と口縁部から体部にかけて自然軸が付着する。復元口径10.9cm、復元底径7.8cm、高台は途中までしか遺存していないため器高は不明である。胎土は密で焼成も良好である。体部の外面は回転ナデが施され、高台部は回転ヘラケズリで削り出された後、台内側の器部外底に回転ナデが施される。

6は土師器の杯で、口縁部から底部までの1/3ほど復元できた。色調は黒褐色で、外面にまばらに煤が付着する。復元口径11.6cm、復元底径5.0cm、器高4.1cm、胎土は密で焼成も良好である。体部の外面は回転ヘラケズリの後、上半分のみナデが施され、内面はナデが施される。底部外面は手持ちヘラケズリが全面及び体部下端部まで施され、切離し技法は不明である。

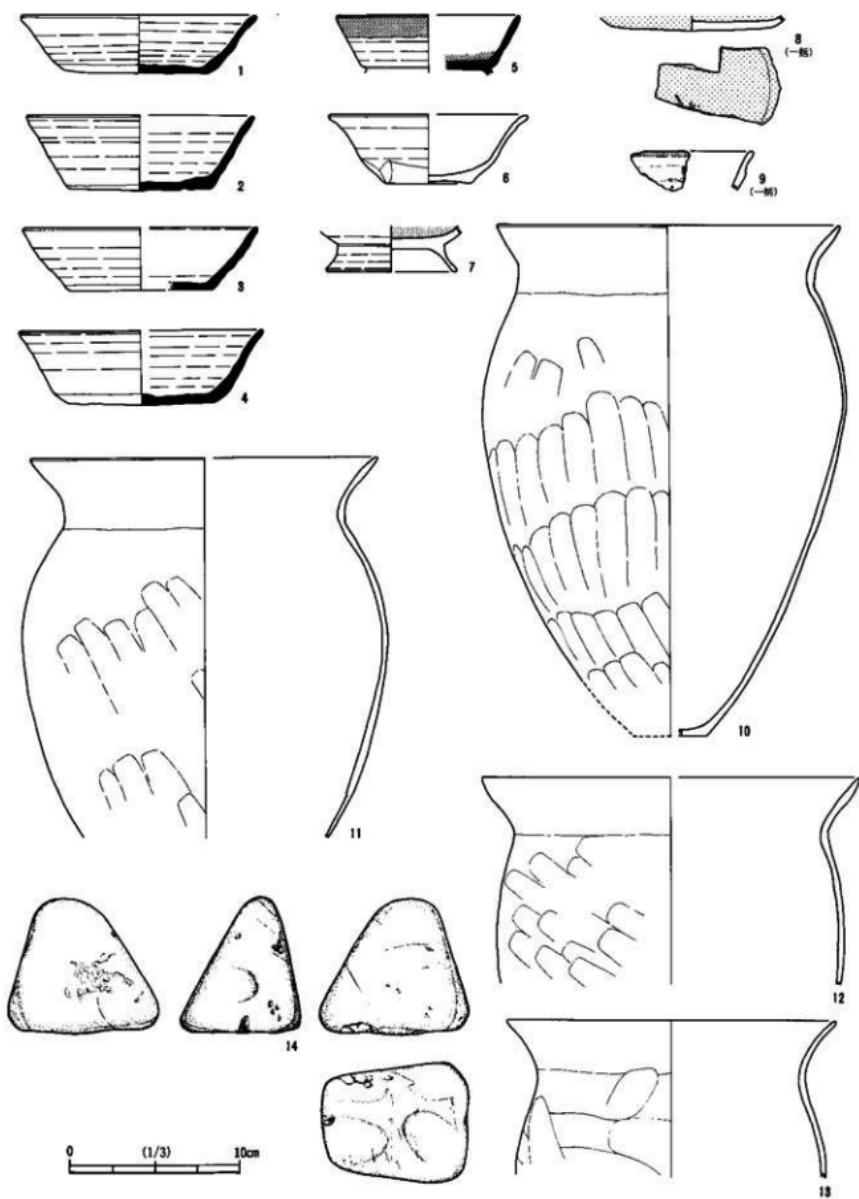
7は土師器の高台付杯で、底部の一部から高台までの部分の破片である。内面は黒色処理がなされ、外面には部分的に煤が付着する。高台は貼付高台で、裾径7.6cm、器台高1.6cm、内外面ともにナデが施される。胎土は密で白色針状物質が微量含まれ、焼成も良好である。底部外面は回転糸切りの後、丁寧なナデが施される。

8、9は本造構一括出土の土師器の杯の破片で、墨書き土器である。8は底部の一部分の破片である。内外面ともに赤彩が施され、墨書きは底部外面に描かれているが、破片のため判読不明である。9は口縁部の破片である。内面及び口縁部外面の一部にまで黒色処理が施され、墨書きは体部外面に描かれているが、破片のため判読不明である。

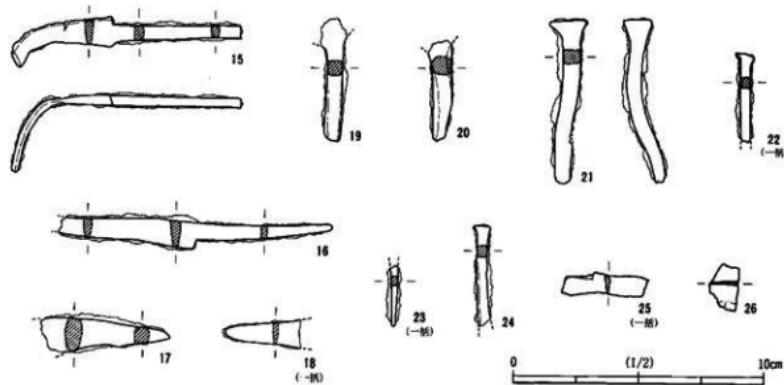
10～13は土師器の甕である。10はカマド右袖脇の貯蔵穴から出土したもので、口縁部から底部までの3/4ほど復元できた。口径20.3cm、復元底径4.3cm、器高30.0cm、最大径は胴部上位にあり21.4cmである。胎土は密で焼成も良好である。器壁は薄く、内外面ともに広範囲に煤が付着する。胴部外面は縱位のヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面は丁寧なナデが施される。底部外面は手持ちヘラケズリが全面に施されている。11は口縁部から胴部までの1/3ほど復元できた。復元口径20.5cm、最大径は胴部上位にあり21.5cmである。胎土は密で焼成も良好である。器壁は薄く、内面には広範囲に煤が付着する。胴部外面は斜位のヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面は丁寧なナデが施される。12は口縁部から胴部上位までの1/5ほど復元できた。復元口径23.4cm、最大径は口縁部にある。胎土は密で焼成も良好である。器壁は薄く、内外面には煤の付着があまりなく、色調は若干赤味がかったり。胴部外面は斜位のヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面は丁寧なナデが施される。13は口縁部から胴部上位までの1/10ほど復元できた。復元口径19.4cm、最大径は口縁部にある。胎土は密で焼成も良好である。器壁は薄く、内外面ともにまばらに煤が付着する。胴部外面は雑なヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面は丁寧なナデが施される。

14は敲石で、全体の形状は四角錐状を呈し、全面を丁寧に研磨している。敲面は平らで四角形に近く、最大長8.2cm、最大幅6.9cm、使用痕が若干見られる。高さは8.0cm、重量は632gで持ちやすい。石材は砂岩である。

15～26は鉄製品である。15は刀子で、身先端部分が若干欠損する以外はほぼ完形に近く、身部は中央部分からほぼ90度折り曲げられている。残存長11.1cm（身部6.1cm、茎部5.0cm）である。16は刀子で、身先



第9図 SI001号 積穴住居跡出土遺物実測図①



第10図 SI001号 積穴住居跡出土遺物実測図②

端部分を欠損するが、基部は100%遺存する。残存長10.9cm（身部5.6cm、基部5.3cm）である。17は刀子の基部で、残存長5.1cmである。18は本遺構一括出土の刀子の身先端部分で、残存長3.0cmである。19は鐵の茎の部分で、残存長5.0cm、茎幅0.7cm、茎厚0.5cmで、重量は5.69gである。20は鐵の茎の部分で、残存長4.1cm、茎幅0.8cm、茎厚0.7cmである。21は断面四角の釘で、長さ6.6cm、幅0.7cm、厚さ0.6cmである。22は断面四角の釘で、残存長3.6cm、幅0.5cm、厚さ0.5cmである。23も断面四角の釘で、残存長2.4cm、幅0.4cm、厚さ0.4cmである。22、23は本遺構一括出土の釘で、中央部分が欠損しているが、形状と錯の具合から同一個体であった可能性がある。24は断面四角の釘で、残存長3.9cm、幅0.4cm、厚さ0.5cmである。25は本遺構一括出土の不明鉄製品で、長さ3.4cm、最大幅0.8cm、最小幅0.7cmである。26は不明鉄製品で、最大幅1.15cm、最小幅0.4cm、厚さ0.1cmである。

SI002 (第11、12図、図版2-1, 3-3, 9)

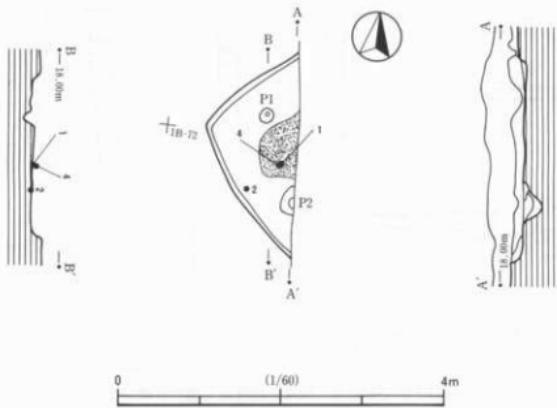
位置・形状

1B-72に位置し、県道に面しており調査可能区域ぎりぎりまで拡張したが、調査できたのは一部分のみであった。平面形態は、検出できた部分から推定すると方形である。確認面から床面までの深さは、最大深12.0cm、最小深6.4cmである。検出できた部分では壁溝は認められなかった。床面中央部分には厚さ5mm前後の焼土が堆積しており、この焼土範囲が床の硬化面と一致した。柱穴は2基（P1, P2）が検出され、P2は半分しか調査できなかった。深さはP1=15.4cm, P2=18.5cmである。

出土遺物

一部しか調査できなかったこともあり、遺物も少なく土器片10点の出土にとどまった。そのうちP1の覆土内から1点出土したが、図示できなかった。図示できた遺物は、須恵器の高台付杯1点、土師器の杯1点、皿1点、甕1点の計4点である。また、覆土内からはナイフ形石器が出土したが、後世の擾乱による流入である。「5 一括出土遺物」の項に掲載した。

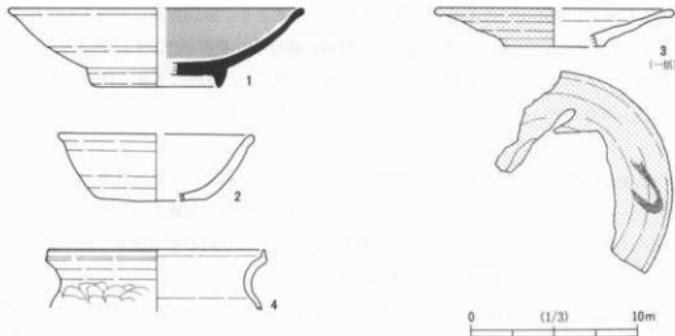
1は須恵器の高台付杯で、口縁部から高台までの1/5ほど復元できた。復元口径17.5cm、器高4.7cm、横径8.4cm、器台高0.7cm、胎土は密で焼成も良好である。体部の輪轂成形痕は明瞭で、内面全体に自然軸が付着する。高台は貼付高台で、貼付後、台内側の器部外底に丁寧な回転ナデが施される。



第11図 SI002号 竖穴住居跡実測図

2は土師器の杯で、口縁部から底部の一部までの1/5ほど復元できた。復元口径11.6cm、復元底径6.5cm、器高3.9cm、胎土は密で焼成も良好である。体部内外面は回転ヘラケズリの後、丁寧なナデが施され部分的に光沢を見せる。底部外面は丁寧なナデが施され、切離し技法は不明である。

3は本遺構一括出土の土師器の皿で、口縁部から底部の一部までの1/4ほど復元できた。体部外面は赤彩され、正位で「つ」の墨書がある。復元口径14.4cm、復元底径6.0cm、器高2.2cm、胎土は密で焼成も良好である。体部外面は回転ヘラケズリの後、ナデが施され、内面は回転ナデが施される。底部はほとんど欠



第12図 SI002号 竖穴住居跡出土遺物実測図

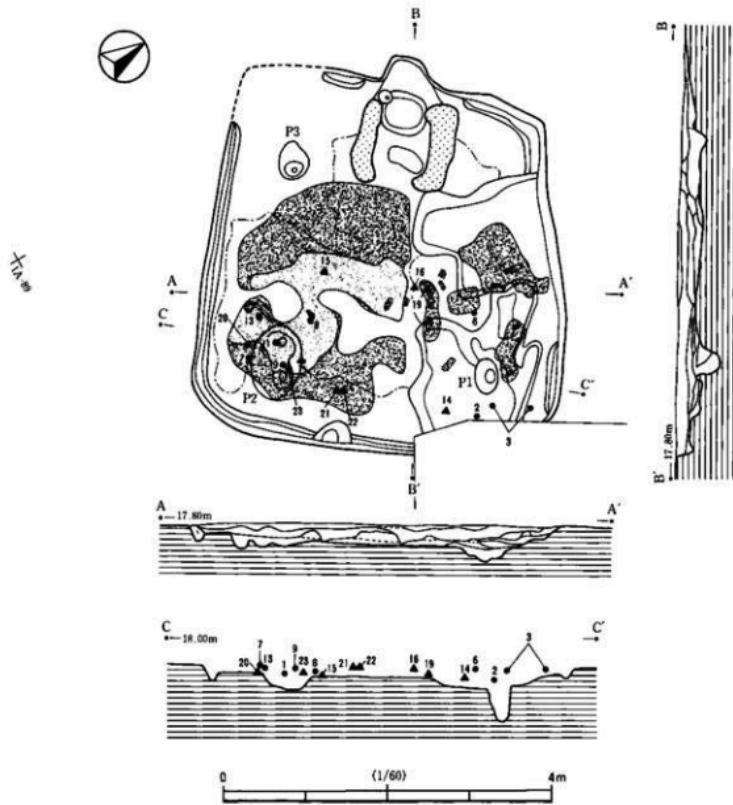
損しているため、切離し技法は不明である。

4は土器の甕で、口縁部の一部分のみの破片である。胴部上位から口縁部へは、若干「く」の字状に立ち上がり、口縁部外面に一段の陵をもつ。復元口径13.0cm、胎土は密で焼成も良好である。胴部外面は縦位のヘラケズリ、口縁部外面はヨコナデが施され、外面ともに煤が付着する。

SI003 (第13~15図、図版2-1, 4-1, 10, 13~15)

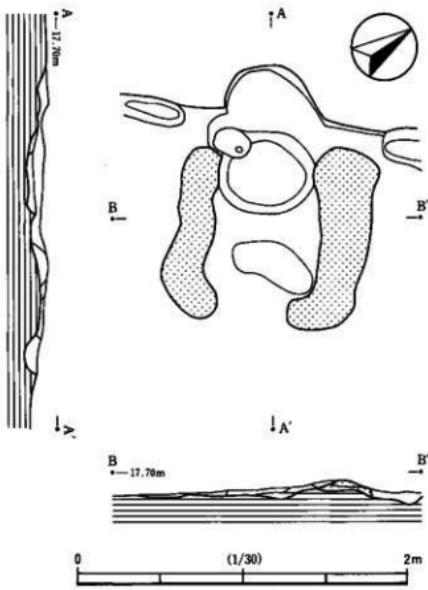
位置・形状

IA-79に位置し、SI010を周囲約50cm拡張し、床を貼り整形してい建替住居である。本遺構の東側コーナー部分は、地下に埋設ケーブルがあるため一部未掘部分ができた。平面形態はやや不正な方形で、長軸4.78m、短軸4.48m、復元床面積16.76m²、住居方位N-52.0°-Wである。確認面から床面までの深さは浅く、最大深19.0cm、最小深1.0cmで、西側コーナー部分では擾乱が著しく、壁も確認できなかった。壁溝は未掘区や、擾乱のため全周するかどうかは不明である。床面は硬化面は見られたが、若干の凹凸があり全体的



第13図 SI003号 穫穴住居跡実測図

に平らではない。また、焼土や炭化材が広範囲に見られ、焼失住居である。柱穴は3基（P1, P2, P3）が検出され、深さはP1=44.7cm, P2=54.0cm, P3=41.7cmである。カマドは削平が激しくかろうじて袖部を検出することができた。



第14図 SI003号 肪穴住居跡カマド実測図

復元底径6.6cm、器台高1.0cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともに回転ナデが丁寧に施される。

3は須恵器の甕で、腹部下位から底部の一部まで復元できた。外面は底部外周を除けば全面に自然釉が付着する。復元底径14.4cm、胎土は密で焼成も良好である。外面は回転ヘラケズリの後、ナデが施され、内面及び底部外面は、雑なナデが施される。

4, 5は本遺構一括出土の土師器の杯である。4は口縁部から底部外周までの1/6ほど復元できた。復元口径14.0cm、胎土は密で白色針状物質が微量含まれ、焼成も良好である。外面はヘラケズリ、内面はナデが施され、色調はやや赤味がかっている。5は口縁部から体部の一部までの1/7ほど復元できた。SI010出土の土器片と遺構間接合した。復元口径15.6cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともにナデが施され、外面はやや厚めに煤が付着している。

6は土師器の高杯部の破片である。復元口径10.6cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともに丁寧に磨かれ、部分的に光沢があり、赤彩されている。

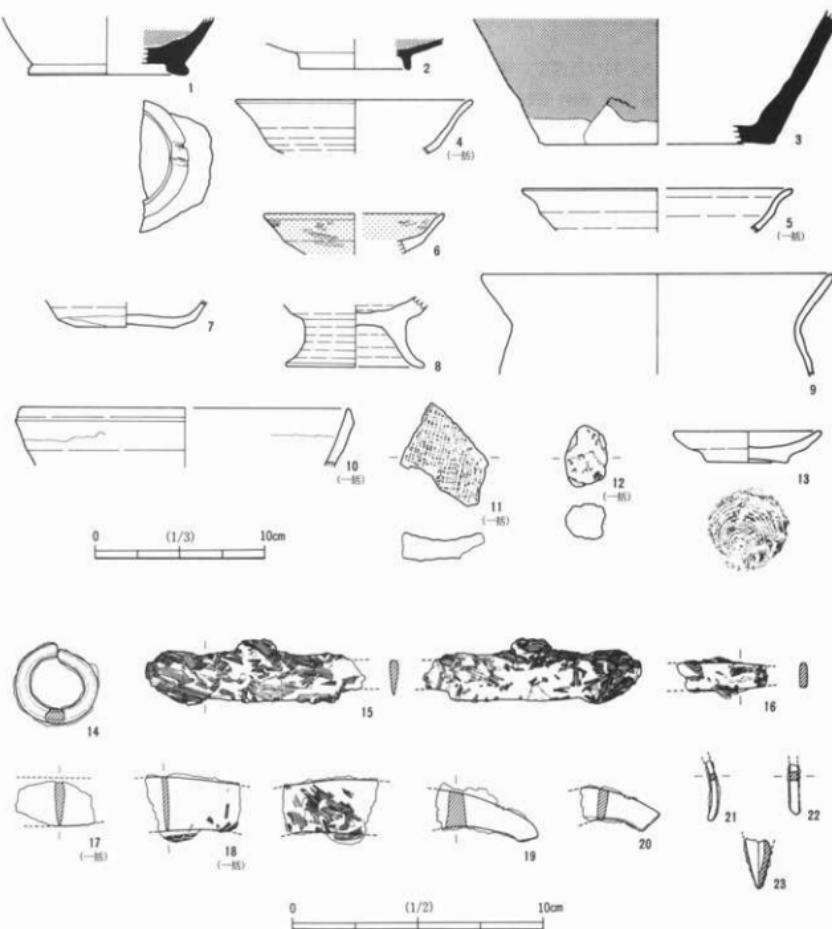
7は土師器の杯で、底部からその外周までの破片である。復元底径5.8cm、胎土は密で白色針状物質が微量含まれ、焼成も良好である。底部外面は回転糸切りの後、手持ちヘラケズリが全面に施される。

8は土師器の高台付小型甕の破片である。復元底径8.2cm、器台高2.7cm、胎土は砂粒と白色針状物質がやや多く含まれ、ざらつきがある。焼成は良好である。内外面ともにナデが施される。

出土遺物

遺構上面がかなり削平され、確認面から床面までが浅かったこともあり、土器量も少なく小片が大部分であった。図示できた遺物は、須恵器の高台付杯2点、甕1点、土師器の杯2点、高杯1点、甕2点、小型甕1点、高台付小型甕1点、かわらけ小皿1点、布目瓦1点、軽石1点、鉄製品10点の計23点である。また、覆土中から、栗の炭化種子が1点出土したが実測不能であった。

1, 2は須恵器の高台付杯である。1は高台部の一部分の破片で、内部底面には自然釉が付着する。高台は貼付高台で、復元底径9.5cm、器台高0.6cm、高台底面には焼成前に付けられたヘラ痕が2か所見られる。胎土は密で焼成も良好である。外面は回転ナデが施され、高台部は貼付後、台内側の器部外底に丁寧な回転ナデが施される。2は高台部の一部分まで復元でき、内面には自然釉が付着する。高台は貼付高台で、



第15図 SI003号 竪穴住居跡出土遺物実測図

9は土師器の甕で口縁部の一部が復元できた。復元口径20.6cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面は摩耗しており、調整技法は不明である。10は器形不明の土師器で口縁部の一部が復元できた。本遺構一括出土の土器片で、SI010出土の土器片と遺構間接合した。復元口径14.1cm、胎土は砂粒と白色針状物質がやや多く含まれるが、焼成は良好である。口縁部外面には一段の陵があり、内外面ともにナデが施される。

11は布目瓦の破片で、出土部位は不明である。

12は軽石で、P 2 覆土内一括出土である。

13はかわらけの小皿で、ほぼ完形に近い。口径8.6cm、底径4.8cm、器高1.9cm、胎土は密で白色針状物質が微量含まれ、焼成も良好である。内外面ともにナデが施され、底部は回転糸切りの後、外周に強いナデ

が施され、高台状を呈す。

14~23は鉄製品である。14は耳環で、鋳化がすみ若干凹凸がある以外はほぼ完形に近い。長径3.3cm、短径3.2cm、環断面長径0.7cm、環断面短径0.6cmである。15は刀子で身先端部分と茎の部分を欠損する。身の部分の両面には木質が分厚く付着しており、木質の鞘に納められていた可能性もある。残存長8.7cmである。16は刀子の身から茎にかけての部分で、両面に木質が付着し、身の部分は片面が欠損している。残存長3.6cmである。17は本遺構一括出土の刀子の身の部分で、残存長3.2cmである。18は鎌の身の部分で、両面に木質が付着する。残存長3.7cmである。19は鎌の茎の部分で、残存長4.1cmである。20は手鎌の茎の部分で、残存長3.2cmである。21、22は断面四角の釘で、21は残存長2.4cm、幅0.3cm、厚さ0.3cmである。22は残存長2.0cm、幅0.4cm、厚さ0.3cmである。23は用途不明で、内部に木片が付着する。残存長2.0cm、残存最大径1.1cm、厚さ0.3cmである。

SI004 (第16, 17図、図版2-1, 4-3, 10, 15)

位置・形状

1B-60に位置し、北東側でSI001を切り、南西側でSI005に切られている。本遺構南側部分では、地下に埋設ケーブルがあるため大きく未掘部分ができ、北側部分では、重機による深さ2mほどの擾乱が入っていた。また、本遺構上面では、農地から転用される際に旧表土が外に持ち出され、山砂が1.2mほど客土として盛られていた。その際に重機で掘削された擾乱の一部が床面まで達しており、床面には大小6か所の擾乱が検出部分の半分をしめ、遺存状態も極めて悪い。床面には硬化面が明確に確認できる。平面形態は検出された部分から推定すると方形で、規模は不明である。遺存する確認面から床面までの深さは浅く、最大深14.2cm、最小深5.9cmである。壁溝は遺存していた壁下には検出されなかった。擾乱を受けなかった床面からは、ピット(P1)が検出され、深さは8.7cmであった。

出土遺物

上記のようにかなり擾乱・削平され、確認面から床面までが浅かったこともあり、土器量は少なく小片が大部分であった。図示できた遺物は、土師器の杯2点、鉄製品1点の計3点のみである。

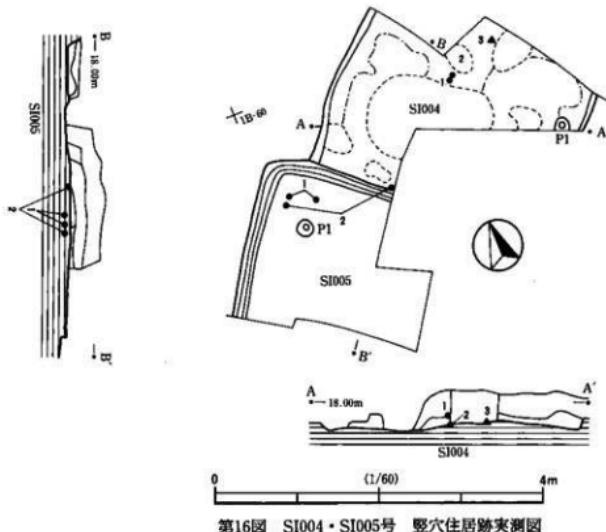
1, 2は土師器の杯である。1は口縁部から底部の一部までの1/5ほど復元できた。復元口径12.9cm、復元底径7.6cm、器高3.9cm、胎土は密で焼成も良好である。体部外面は回転ヘラケズリの後、ナデが施され、内面はナデの後、丁寧なヘラミガキが施され光沢がある。底部外面は回転糸切りの後、ナデが施される。2は口縁部から体部の一部までの1/5ほど復元できた。SI001出土の土器片と遺構間接合した。復元口径13.3cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともに丁寧なナデが施され、色調は若干赤味がかっている。

3は鉄製品の刀子の茎部片で、残存長5.3cmである。

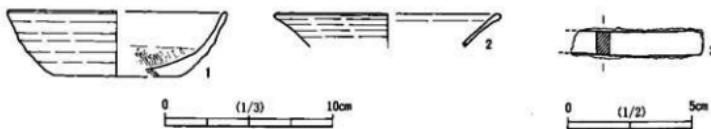
SI005 (第16, 18図、図版2-1, 4-3, 10)

位置・形状

1B-60に位置し、北東側でSI004を切り、南西側でSI003とSI010に切られている。先述のSI004と同様に、本遺構南東側部分では、地下に埋設ケーブルがあるため大きく未掘部分ができた。擾乱は床面まで達することはなかったが、本遺構上面は重機により削平され、遺存状態は悪い。確認面から床面までは非常に浅く、最大深6.9cm、最小深0.6cmである。平面形態は検出された部分から推定すると方形で、規模は不明である。壁溝は遺存していた部分には検出された。床面は硬化面の検出はできなかった。柱穴(P1)が検出され、深さ10.7cmである。



第16図 SI004・SI005号 穫穴住居跡実測図



第17図 SI004号 穫穴住居跡出土遺物実測図



第18図 SI005号 穫穴住居跡出土遺物実測図

出土遺物

前述のように床面近くまで重機により削平されているため、土器量も少なく小片が大部分であった。図示できた遺物は、土師器の杯1点、甕1点の計2点のみで、2点とも本遺構床面出土の土師器片である。

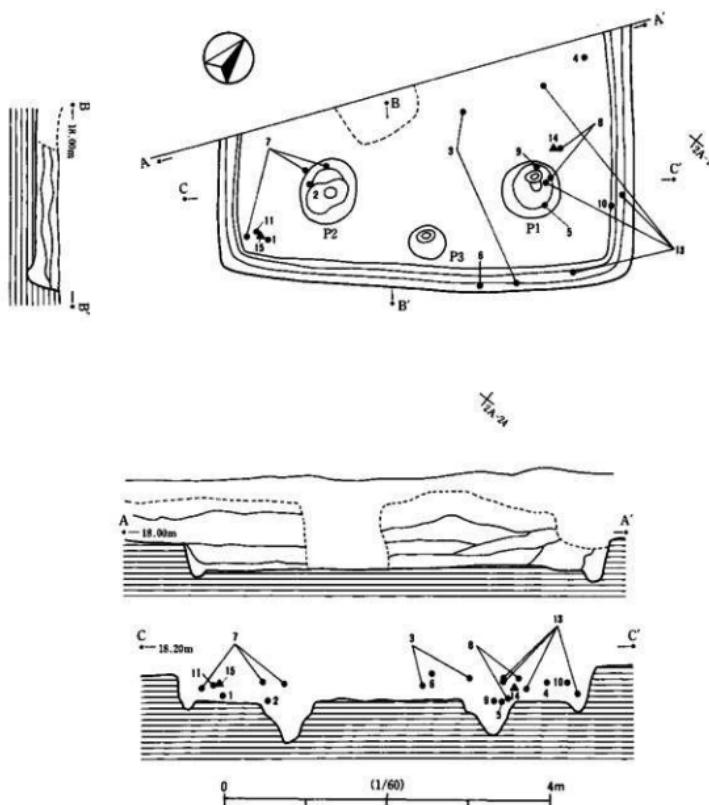
1は土師器の杯で、口縁部から底部までの1/2ほど復元できた。口径13.0cm、底径6.8cm、器高3.7cm、胎土は密で白色針状物質が微量含まれ、焼成も良好である。体部外面は回転ヘラケズリの後、ナデが施され、内面はナデが施される。底部外面は回転糸切りの後、回転ヘラケズリが底部全面及び体部下端部まで施され、口縁部は外反して立ち上がる。

2は土師器の甕で、底部の一部のみ復元できた。SI004出土の土器片と遺構間接合した。復元底径13.3cm、胎土は密で焼成も良好である。切離し技法は不明で、手持ちヘラケズリが施される。

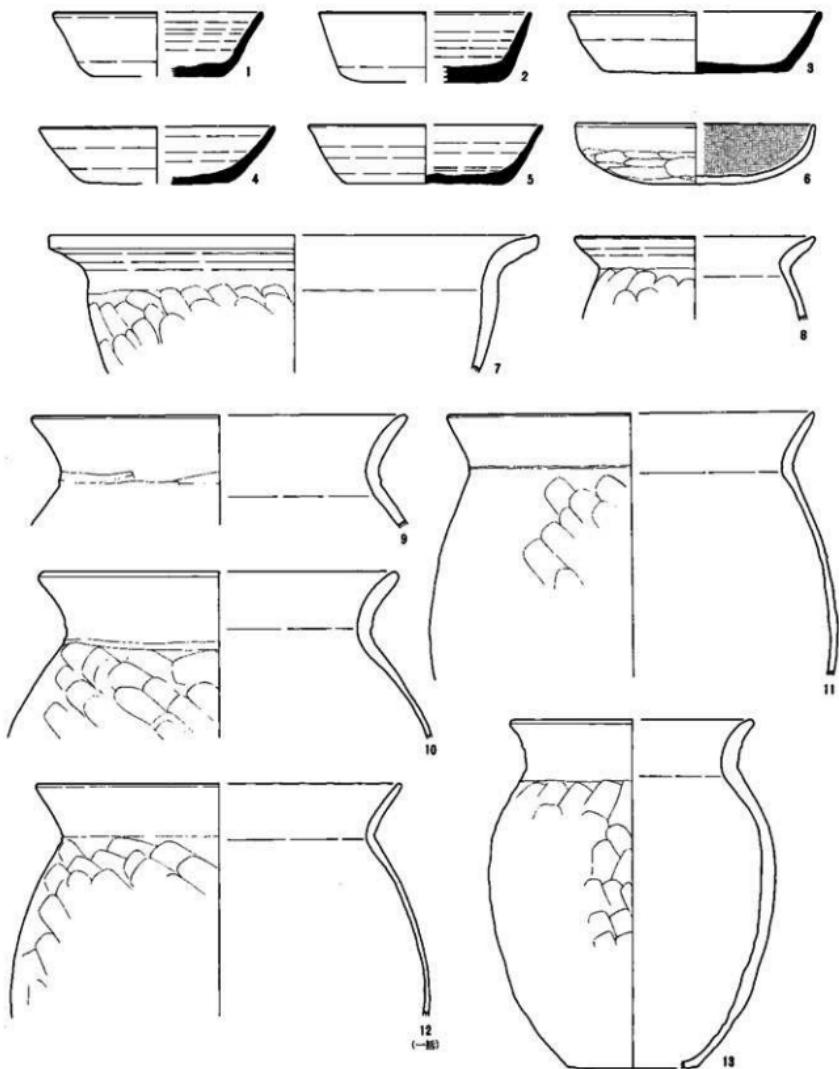
SI006 (第19~21図、図版2-2, 5-1, 2, 10, 11, 14, 15)

位置・形状

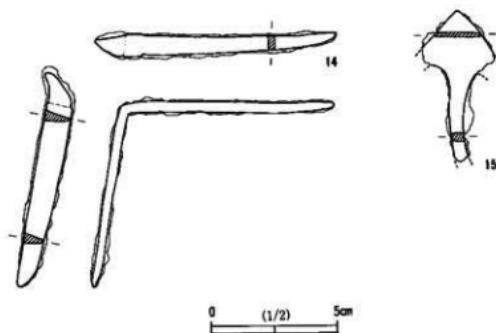
本遺跡全体からすると南西側の2A-04に位置し、拡張できるぎりぎりまで調査区域を広げたが、半分以上が未掘となった。カマドは未掘区にあると思われ、長軸は不明、短軸5.08cm、検出床面積10.91m²、住居方位N-38°-Wである。平面形態は方形と思われる。確認面から床面までの深さは、最大深39.0cm、最小深28.1cmである。壁溝は検出部分では丁寧に構築されているが、全局するかどうかは不明である。検出された床面は一部擾乱を受けているが、全面が平坦に硬化しており、遺存状態は良好であった。柱穴は2基（P1, P2）が検出され、いずれも柱は抜き取られており、柱穴底面は柱の当たり部分が硬化していた。深さはP1 = 38.6cm, P2 = 27.9cmである。P3は梯子ピットで深さはP3 = 25.9cmである。



第19図 SI006号 積穴住居跡実測図



第20図 SI006号 穹穴住居跡出土遺物実測図①



第21図 SI006号 堪穴住居跡出土遺物実測図②

出土遺物

半分以上が未掘の状況ではあったが、覆土中からは比較的多くの土器片が出土した。しかし、その大部分は小片で復元不能であった。図示できた遺物は、須恵器の杯5点、土師器の杯1点、甌1点、甕6点（うち小型甕2点）、鉄製品2点の計15点である。

1～5は須恵器の杯である。

1は口縁部から底部の一部までの1/3の破片である。復元口径

12.4cm、復元底径7.8cm、器高3.9cm、胎土は砂粒を微量含むが密で焼成も良好である。体部外面は若干摩耗しているが、輪轆成形痕が見られ、内面は丁寧なナデが施される。底部外面は手持ちヘラケズリが施され、切離し技法は不明である。2は口縁部から底部の一部までの1/3の破片である。復元口径12.4cm、復元底径8.0cm、器高4.2cm、胎土は密で焼成も良好である。体部の輪轆成形痕は明瞭で、内面は丁寧なナデが施される。底部外面は回転ヘラ切りの後、回転ナデが施される。3は口縁部から底部までの1/3ほど復元できた。復元口径14.6cm、復元底径11.0cm、器高3.7cm、胎土はやや大きめの砂粒を少量含み焼成は良好である。外面には丁寧なナデが施され、底部外面は回転ヘラ切りの後、回転ナデが施される。4は口縁部から底部の一部までの1/4の破片である。復元口径13.8cm、復元底径8.4cm、器高3.5cm、胎土は密で焼成も良好である。体部の輪轆成形痕は明瞭で、底部外面は手持ちヘラケズリが施され、切離し技法は不明である。5は口縁部から底部までの1/3ほど復元できた。復元口径13.6cm、復元底径9.4cm、器高3.6cm、胎土は密で焼成も良好である。全体的な色調はやや黒味を帯びる。体部の輪轆成形痕は明瞭で、内面はナデが施される。底部外面は手持ちヘラケズリが施され、切離し技法は不明である。

6は土師器の杯で、口縁部から底部までの1/2ほど復元できた。口径14.2cm、復元底径4.9cm、器高3.7cm、胎土は密で焼成も良好である。内面は丁寧なナデが施され、口縁部の一部を除き黒色処理が施される。外側は内面よりはやや雑なナデが施される。

7は土師器の甌で、口縁部から胴部上位まで復元できた。復元口径29.2cm、器壁は厚く重量感がある。口縁部の外面と、遺存する内面全体には煤が付着する。口縁部外面はヨコナデ、胴部外面は斜位のヘラケズリの後、ナデが施され、胴部内面には全体にナデが施される。

8は土師器の小型甕で、口縁部から胴部上位まで復元できた。復元口径14.1cm、内面には多量の煤が付着しており、黒色を呈す。胎土は密で焼成も良好である。口縁部外面はヨコナデ、胴部外面はヘラケズリの後、ナデが施され、胴部内面はナデが施される。

9～12は土師器の甕で、最大径を胴部上位に持つ甕の口縁部から胴部上位にかけて遺存する。

9は復元口径22.2cm、内外面ともに摩耗が著しく調整方法は不明である。10は復元口径20.9cm、口縁部の内外面はヨコナデ、胴部外面は斜位のヘラケズリが施され、胴部内面はナデが施される。11は復元口径

21.8cm、胎土は白色針状物質を微量含み密で焼成も良好である。口縁部内外面はヨコナデ、胸部外面は斜位のヘラケズリの後、ナデが施され、胸部内面はナデが施される。12はP2覆土内一括出土で、復元口径21.6cm、胎土は砂粒を若干含み焼成は良好である。口縁部内外面はヨコナデ、胸部外面は斜位のヘラケズリの後、ナデが施され、胸部内面はナデが施される。

13は土師器の小型甕で、口縁部から底部の一部まで復元できた。復元口径14.4cm、復元底径7.9cm、器高20.6cm、復元最大径を胸部上位に持ち、17.2cmである。胎土は密で焼成も良好である。口縁部内外面はヨコナデ、胸部外面はヘラケズリの後、ナデが施され、胸部内面はナデが施される。

14、15は鉄製品である。14は刀子で、ほぼ完形品である。身部の茎よりのところからほぼ90度折り曲げられ、茎部には若干木質が付着する。全長16.0cm、刀身長8.3、茎長7.7である。15は鐵で、身の形態は脇抉三角形式である。残存長6.0cm、鐵身最大幅2.8cm、鐵身厚0.2、範被幅0.5cm、範被厚0.4cmで、逆刺は欠損しているため逆刺長は不明である。

SI007 (第22~26図、図版2-2, 5-3, 6-1, 11~15)

位置・形状

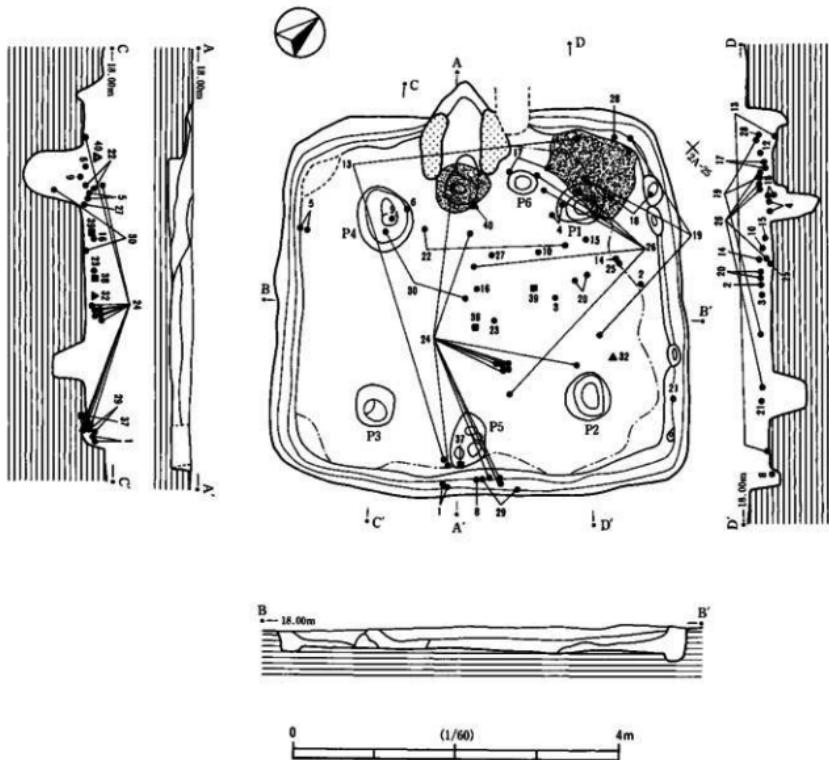
本遺跡全体からすると南西側の2A-24に位置し、竪穴住居跡の中では確認できた範囲内において、本遺構のみが重複がない。遺構の上面やカマド右脇部分など擾乱・削平は受けているが、本遺跡では遺存状態は良い方である。平面形態はやや隅丸気味の方形で、長軸4.96cm、短軸4.94cm、床面積20.50m²、住居方位N-48°-Wである。確認面から床面までの深さは、最大深39.1cm、最小深18.2cmである。壁溝は全周する。床面は一部擾乱を受けているが、硬化面が広範囲に確認され、凹凸は少なく平らである。柱穴は4基（P1, P2, P3, P4）が検出され、いずれも深くしっかりしている。深さはP1=58.8cm, P2=43.5cm, P3=42.4cm, P4=72.2cmである。カマド対壁直下には梯子ピット（P5）が検出され、深さはP5=24.6cmである。カマド右袖脇にはピット1基（P6）が検出されたが、その深さはP6=18.0cmである。カマド右袖部には補強の跡が見られ、基底部が若干広がる。また、焼土は焚き口部分に集中している。

出土遺物

本遺構の遺存状態は比較的良好で、覆土中からは多量の土器片が出土した。その大部分は小片で復元不能のものも多かったが、図示できた遺物は、本遺跡検出の竪穴住居跡出土遺物の中では最も多い。

須恵器の蓋3点、杯5点、高台付杯1点、盤2点、甕1点、土師器の杯7点、器台1点、甕11点（うち小型甕2点）、鉄製品5点、石皿1点、敲石1点、輕石1点、土製品1点の計40点である。また、本遺構からは覆土中から、スモモの炭化種子が1点出土したが実測不能であった。

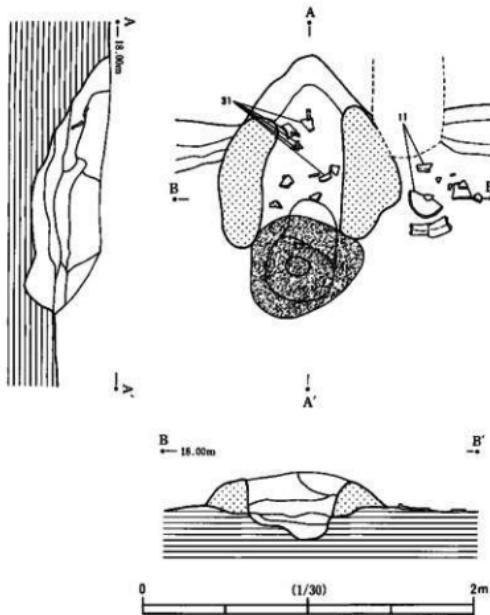
1~12は須恵器である。1は蓋で、鉢部が欠損した後を適度に削り、皿として再利用している。1/3ほど復元でき、復元口径15.0cmである。胎土は密で焼成も良好である。内外面ともに丁寧なナデが施される。2, 3は蓋の鉢部で、2は鉢径2.8cm、鉢高0.9cm、3は鉢径3.4cm、鉢高0.9cmである。4~8は杯である。4は口縁部から底部までの1/2ほど復元できた。復元口径13.5cm、復元底径7.7cm、器高3.6cm、胎土は白色針状物質を多量に含み焼成は良好である。内外面ともに丁寧なナデが施され、底部外面は回転糸切りの後、外周に回転ヘラケズリが施される。色調は青灰色を呈す。5は口縁部から底部までの2/3ほど復元できた。復元口径13.1cm、底径7.2cm、器高3.7cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともにナデが施され、底部外面は回転ヘラ切りの後、雑なヘラケズリが施される。6は口縁部から底部までの2/3ほど復元できた。復元口径13.1cm、底径7.2cm、器高3.7cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともにナデが施され、底



第22図 SI007号 積穴住居跡実測図

部外面は回転ヘラ切りの後、雑なヘラケズリが施される。6は口縁部から底部までの2/3ほど復元できた。復元口径13.8cm、復元底径7.8cm、器高4.3cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともにナデが施され、底部外面は回転糸切りの後、外周に回転ヘラケズリが施される。

7は本遺構一括出土で、口縁部から底部の一部までの1/5ほど復元できた。復元口径13.7cm、復元底径9.0cm、器高4.2cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともにナデが施され、底部外面は手持ちヘラケズリが施され、切離し技法は不明である。8は体部から底部の一部までの破片で、外面には火薙痕が見られる。復元底径9.6cmで、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともにナデが施され、底部外面は手持ちヘラケズリが施され、切離し技法は不明である。9は高台付杯で、ほぼ完形に近い状態まで復元できた。口径11.9cm、器高4.2cm、裾径8.3cm、器台高0.8cm、胎土は密で焼成も良好である。高台は削り出して作られ、底部中央は高台と同じくらいの高さで張り出す。内外面ともに丁寧なナデが施される。10, 11は盤である。10はほぼ完形に近い盤の破片で、口径20.5cm、器高4.5cm、裾径10.8cm、器台高1.3cmである。内外面ともに丁寧なナデが施される。11はカマド内一括出土で2/3ほど復元でき、口径23.6cm、器高3.2cm、裾径14.4



第23図 SI007号 穹穴住居跡カマド実測図

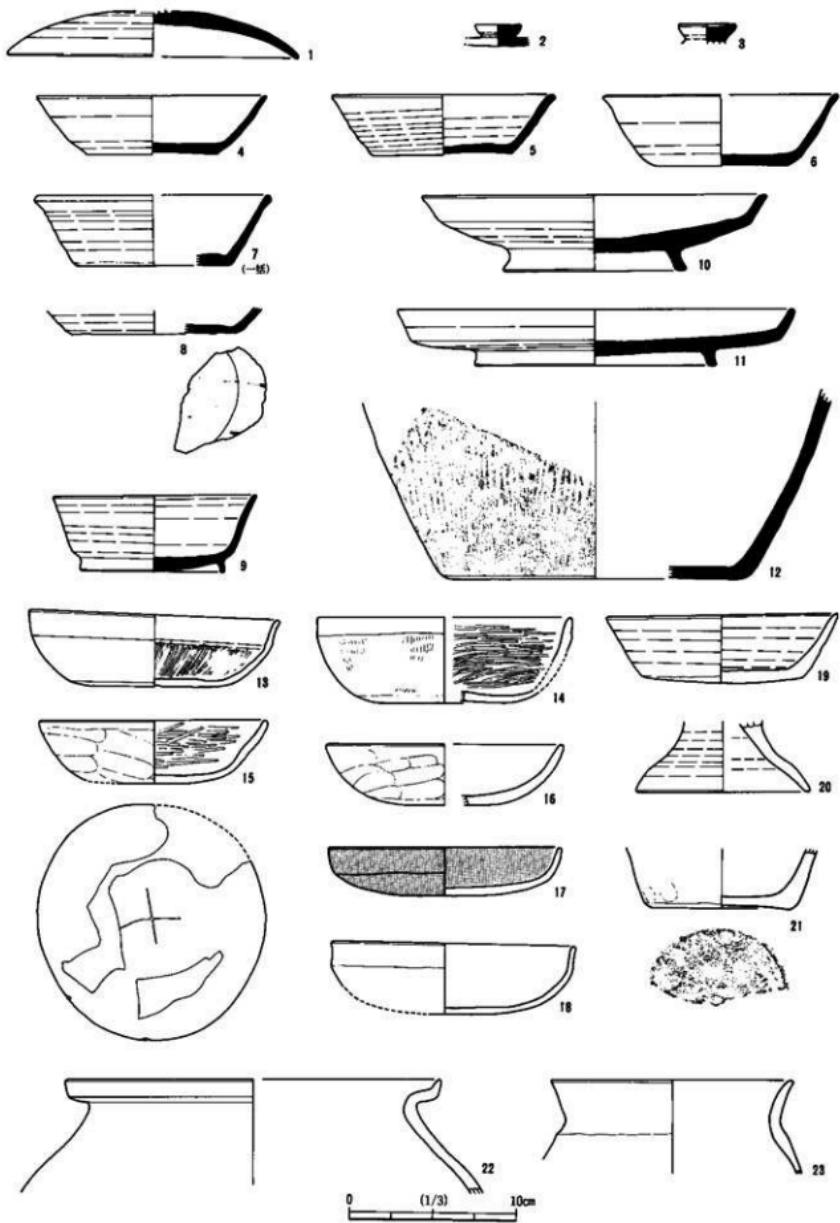
口径13.3cm、底径8.0cm、器高3.7cm、胎土は密で焼成も良好である。外面はヘラケズリが施され、内面はヘラケズリの後、ヘラミガキが施される。内外面ともに煤が付着し、底部外面には線刻がある。16は口縁部から底部の一部までの1/5ほど復元できた。復元口径13.9cm、復元底径5.3cm、器高3.6cm。胎土は密で焼成も良好である。外面は全面にヘラケズリが施され、内面はナデが施される。内外面ともに煤が付着し、色調は黒褐色を呈す。17は1/2ほど復元でき、内外面に黒色処理が施される。口径13.7cm、底径4.8cm、器高2.9cm、胎土は密で焼成も良好である。外面は全面にヘラケズリが施され、内面はナデが施される。18は2/3ほど復元でき、内外面に若干の煤が付着する。口径14.4cm、底径10.5cm、器高4.2cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともに丁寧なナデが施され、やや光沢をもつ。19は2/3ほど復元でき、器壁は厚く重量感がある。内外面には二次焼成を受けた跡があり、器面の一部が赤褐色を呈し、部分的に煤が付着する。口径13.6cm、底径9.6cm、器高4.2cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともに丁寧なナデが施され、底部外面は手持ちヘラケズリが施される。切離し技法は不明である。

20は土師器の器台の脚部で、1/2ほど復元できた。復元器台径10.2cm、復元器台高3.1cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともに丁寧なナデが施される。

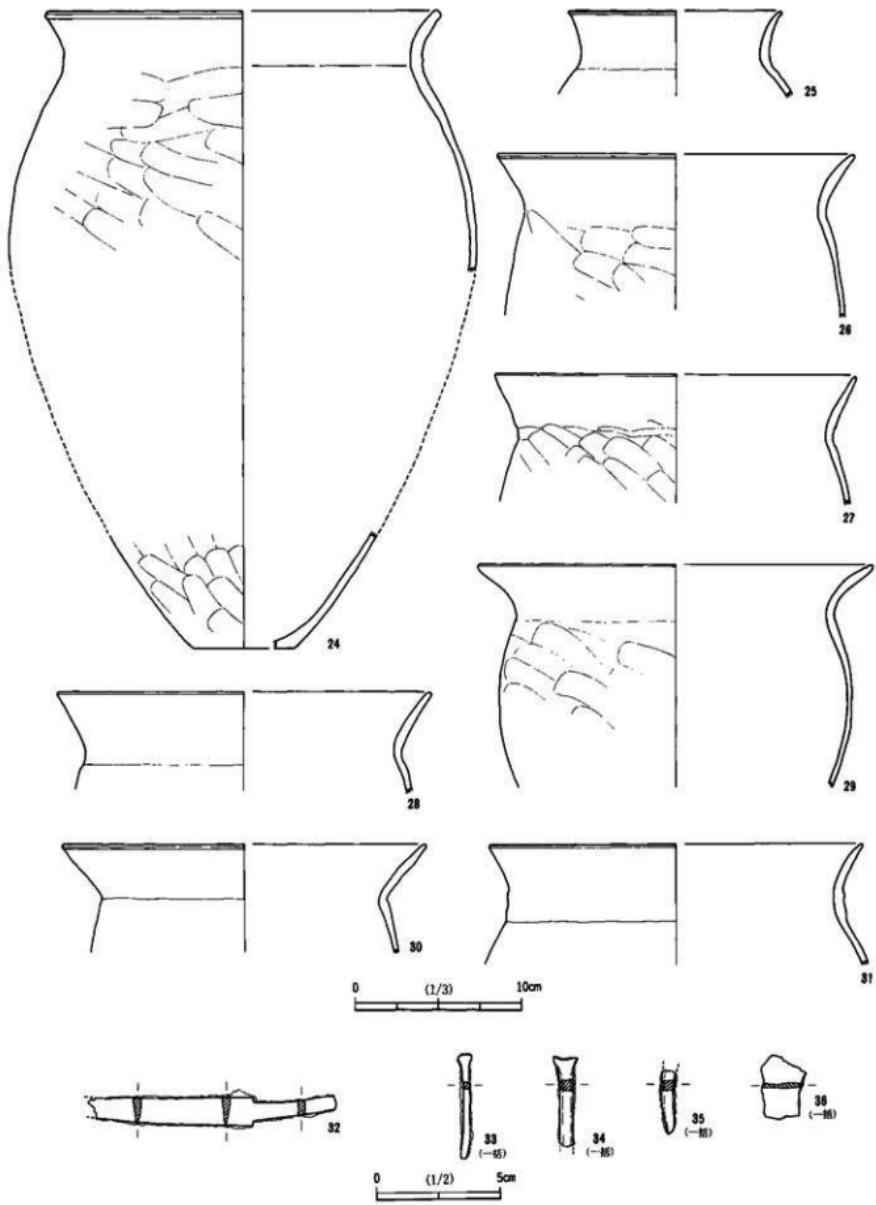
21~31は土師器の甕である。21は底部のみ復元でき、復元底径8.0cmである。内外面ともに摩耗しているが、胎土は密で焼成も良好で、底部外面には木葉痕がある。22は口縁部のみ復元でき、復元口径22.0cmである。口縁部は急激な「く」の字状に立ち上がり、ほぼ直角に口唇部に至る。胎土には砂粒が多く焼成は

cm、器台高0.9cmである。内外面とともに丁寧なナデが施される。12は甕の破片で、復元底径18.2cmである。胎土は密で焼成も良好で、外面は叩きが施され、内面はナデが施される。

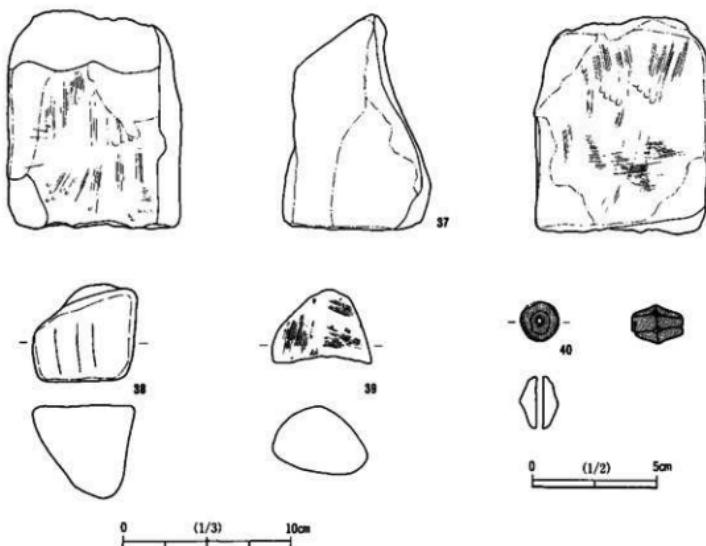
13~19は土師器の杯である。13はほぼ完形まで復元でき、歪みが大きい。口径14.7cm、底径9.6cm、器高4.5cm、胎土は密で焼成も良好である。外面は回転ヘラケズリ、内面は丁寧なヘラミガキが施される。底部外面は全面に手持ちヘラケズリが施され、切離し技法は不明である。14は口縁部から底部の一部までの1/4ほど復元できた。復元口径15.0cm、復元底径10.5cm、器高5.0cm、胎土は密で焼成も良好である。外面は回転ヘラケズリの後、刷毛による調整が施され、内面は丁寧なヘラミガキが施される。底部外面は手持ちヘラケズリが施され、切離し技法は不明である。15は4/5ほど復元でき、歪みが大きい。



第24図 SI007号 墓穴住居跡出土遺物実測図①



第25図 SI007号 壁穴住居跡出土遺物実測図②



第26図 SI007号 積穴住居跡出土遺物実測図③

良好で、内外面ともにナデが施される。23は口縁部のみ復元でき、口径14.2cmである。外面は摩耗が激しく調整技法は不明で、内面はナデが施される。24は胴部が欠損するものの同一個体で、全体を復元実測した。復元口径23.1cm、復元底径6.0cm、復元器高37.9cm、胎土は密で焼成も良好である。外面はヘラケズリが施され、煤がかなり付着する。内面は口縁部で丁寧なナデが施される。25は口縁部の破片で、復元口径12.6cm、胎土は密で焼成も良好である。外面はヘラケズリが施され、内面はナデが施される。底部外面はヘラケズリが施される。内外面ともに煤が付着する。26は口縁部から胴部上位まで復元できた。復元口径21.2cm、胎土は赤味がかったりが密で焼成も良好である。外面はヘラケズリの後、ナデが施され、内面はナデが施される。27は口縁部から胴部上位まで復元できた。復元口径21.6cm、胎土はやや赤味がかったりが密で焼成は良好である。外面はヘラケズリが施され、内面はナデが施される。内外面とも部分的に煤が付着する。28は口縁部のみ復元でき、復元口径21.6cmである。胎土は密で焼成も良好である。外面はヘラケズリが施され、内面はナデが施される。内外面とも部分的に煤が付着する。29は口縁部から胴部中位まで復元できた。復元口径23.5cm、胎土は密で焼成も良好である。外面はヘラケズリが施され、内面はナデが施される。内外面とも広範囲に煤が付着する。30は口縁部のみ復元でき、復元口径22.1cmである。胎土は密で焼成も良好である。外面はヘラケズリが施され、内面はナデが施される。31は口縁部のみ復元でき、復元口径22.2cmである。外面は摩耗が激しく、調整技法は不明である。内面はナデが施される。

32～36は鉄製品である。32は刀子で、身先端部分を欠損する。残存長9.9cm（身部6.6cm、茎部3.3cm）である。33～35は本遺構一括出土の釘で、断面はいずれも四角形である。33は完形品で、長さ4.2cm、幅0.3cm、厚さ0.3cmである。34は頭部の部分で、残存長3.6cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmである。35は先端部分で、

残存長2.6cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmである。36は本遺構一括出土の不明鉄製品で残存長2.6cm、最大幅1.8cm、最小幅1.4cm、厚さ0.2cmである。

37は石皿で、両面に使用痕がある。長さ13.0cm、幅10.1cm、最大厚8.6cm、最小厚5.2cmである。石材は安山岩である。

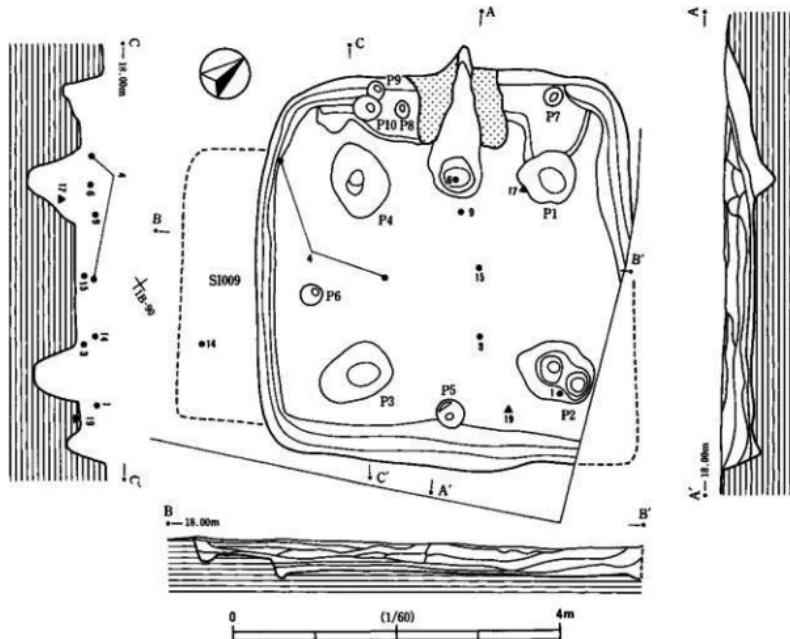
38は敲石で、全体の形状は四角錐に近く、全面を丁寧に研磨している。敲面は平らで台形に近く、最大長6.1cm、最大幅5.0cm、若干の使用痕が見られる。高さは5.6cm、重量は278gである。石材は砂岩である。39は軽石で、3点が接合した。

40は土製の切り子玉で、長さ2.1cm、最大幅1.5cm、最小幅0.8cm、重量は4.11gである。外面は黒色処理が施される。

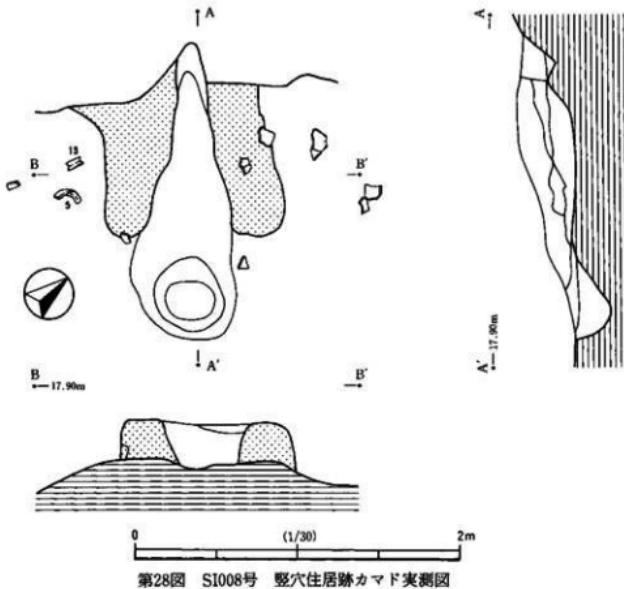
SI008 (第27~30図、図版2-1, 6-2, 3, 7-1, 12~15)

位置・形状

本遺跡全体からすると北側の1B-80に位置し、SI009に南西部分を切られている。北東壁からコーナー部分にかけては、ケーブルが地下に埋設されているため拡張できなかった。また、旧表土を掘削し、山砂を入れる作業が行われているため、確認面で広範囲にわたって重機のツメの跡が残っていた。平面形態は方形で、長軸5.24m、短軸4.54m、床面積（推定）18.76m²、住居方位N-52°Wである。確認面から床面までの深さは、最大深43.7cm、最小深21.0cmである。壁溝は拡張できなかった部分を除けば全周する。床面は



第27図 SI008号 壁穴住居跡実測図



第28図 SI1008号 積穴住居跡カマド実測図

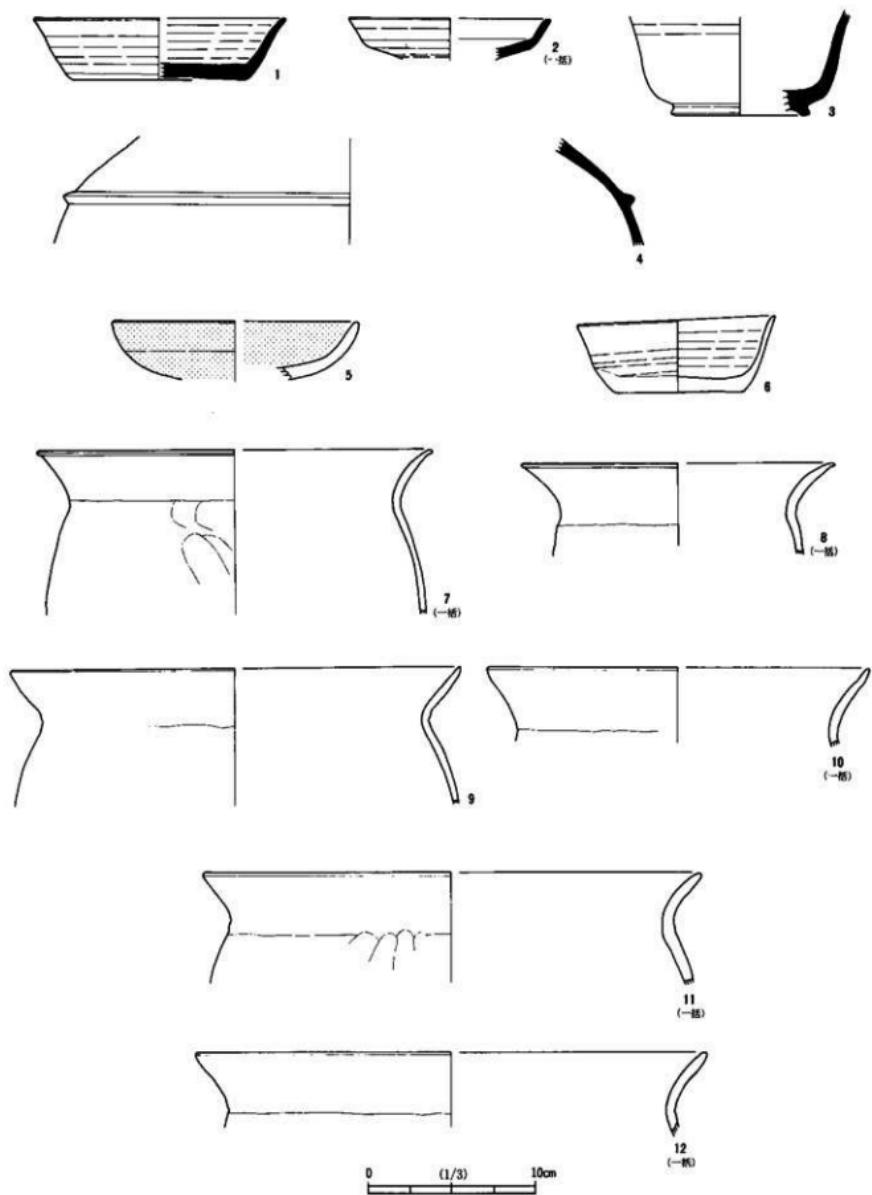
硬化した面は検出されていない。カマド両袖部分に若干のくぼみとピットがある以外は、凹凸はほとんどなく平らである。柱穴はしっかりした4基(P1, P2, P3, P4)が検出され、カマド対壁直下の床面には梯子ピット(P5)が、カマド両袖脇にはピット4基(P6, P7, P8, P9)が、また、南西壁近くにはピット1基(P10)がそれぞれ検出された。深さはP1=44.7cm, P2=48.5cm, P3=53.2cm, P4=66.7cm, P5=21.9cm, P6=11.0cm, P7=15.4cm, P8=22.4cm, P9=19.3cm, P10=23.0cmである。柱穴P2の壁側のピットは柱の抜き取り用のものである。カマドは袖の基部以外は破壊されており、構築材及び焼土が周辺に散乱していた。また、その散乱した構築材及び焼土の堆積土中からはやや大きめの土器片が12点出土した。

カマド袖の基部は住居床面を若干高く盛り上げた状態で構築されており、両袖部外側には広範囲に若干の窪みがある。また、その窪みの中には深さ20cm前後の小ピットが4基検出された。焚き口部前面には、最大深20cmの円形の掘込みが認められた。

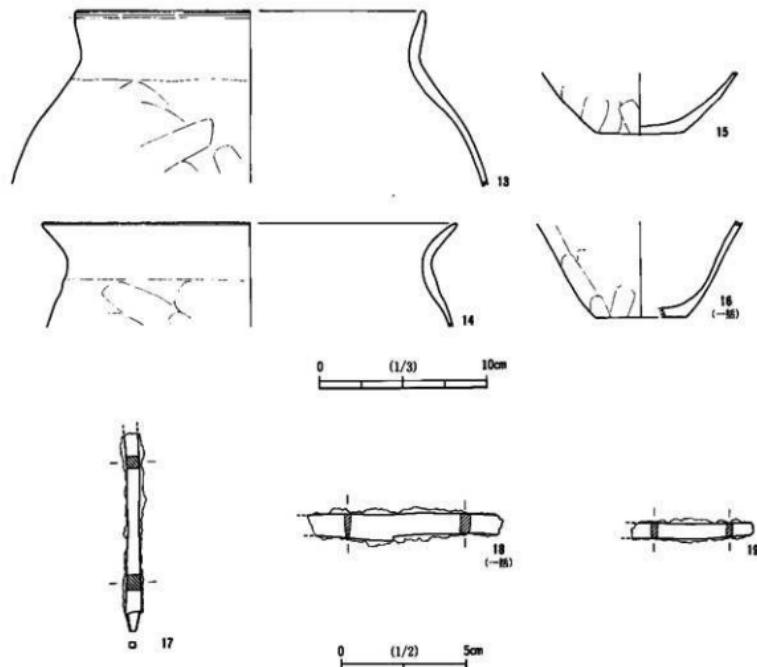
出土遺物

覆土中からは比較的多くの土器片が出土したが、その大部分が小片で復元不能であった。図示できた遺物は、須恵器の杯1点、高杯1点、高台付杯1点、壺1点、土師器の杯2点、壺10点、鉄製品3点の計19点である。

1~4は須恵器である。1は杯で、1/2の破片である。復元口径14.8cm、復元底径10.0cm、器高3.8cmを測り、胎土は密で焼成も良好である。体部外面は摩耗が激しく、かろうじて調整技法がわかる状態である。体部の輪縁形成痕が見られ、口縁部は外反して立ち上がる。底部外面は回転ヘラ切りの後、ナデが施され



第29図 SI008号 積穴住居跡出土遺物実測図①



第30図 SI008号 豊穴住居跡出土遺物実測図②

る。2は本遺構一括出土の高杯の杯部の破片で、復元口径11.8cmである。体部の輥轆成形痕が見られ、内外面ともに、丁寧なナデが施され、外面は焼成時の火棒が見られる。3は高台付杯の破片で、口縁部と底部を欠損する。復元口径8.2cm、器台高0.8cm、胎土は白色針状物質を微量含んでいるが密で焼成も良好である。内外面ともに丁寧な回転ナデが施される。高台は貼付高台で、接合部分には丁寧な回転ナデが施される。4は大型の壺で、1/10ほど復元でき、SI009出土の土器片と遺構間接合した。胎土は密で焼成も良好である。外面は一段の稜をもち、叩きが施される。内面はナデが施される。

5、6は土師器の杯である。5は口縁部から底部の一部までの1/3ほど復元できた。復元口径14.4cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともにナデが施され、ともに赤彩が施されるが摩耗が激しく、赤彩の剥落が目立つ。6は口縁部から底部までの2/3ほどの破片で、底部は100%遺存する。口径11.6cm、底径7.7cm、器高4.5cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともに回転ナデが施され、底部外面は回転ヘラケズリが施される。

7～16は土師器の壺である。7は本遺構一括出土で、口縁部から胴部上位まで復元できた。復元口径23.2cm、胎土は密で焼成も良好である。外面はヘラケズリの後ナデが施され、内面はナデが施される。また、内面は煤が著しく、黒褐色を呈す。8は本遺構一括出土で、口縁部のみ復元できた。復元口径18.4cmを測り、胎土は密で焼成も良好である。外面はヘラケズリの後ナデが施され、内面はナデが施される。9は口縁部から胴部上位まで復元でき、復元口径26.6cmである。胎土は密で焼成も良好である。外面はヘラケズ

リの後ナデが施され、内面はナデが施される。10は本遺構一括出土で、口縁部のみ復元できた。復元口径22.5cm、胎土は密で焼成も良好である。外面は摩耗が激しく調整技法は不明で、内面はナデが施される。11は本遺構一括出土で、口縁部から胴部上位まで復元できた。復元口径29.3cm、胎土は密で焼成も良好である。外面はヘラケズリの後ナデが施され、内面はナデが施される。内外面ともに煤が付着し、黒褐色を呈す。12は本遺構一括出土で、口縁部のみ復元できた。復元口径30.2cm、胎土は赤味がかっているが密で焼成も良好である。内外面ともにナデが施される。13は口縁部から胴部上位まで復元できた。復元口径20.5cm、胎土は密で焼成も良好である。外面はヘラケズリの後ナデが施され、内面はナデが施される。口縁部は大きく外反しない。14は本遺構一括出土の土器片と、SI009出土の土器片とが遺構間接合し、口縁部から胴部上位まで復元できた。復元口径24.6cm、胎土は密で焼成も良好である。外面はヘラケズリの後ナデが施され、内面はナデが施される。15は底部から胴部下位まで復元できた。復元底径5.2cm、胎土は密で焼成も良好である。外面はヘラケズリが施され、煤が付着する。内面はナデが施され、部分的に煤が付着する。16は底部の一部から胴部下位まで復元できた。復元底径5.4cm、胎土は密で焼成も良好である。外面はヘラケズリが施され、部分的に煤が付着する。内面はナデが施される。

17～19は鉄製品である。17は鉄鎌で、範被部から茎部にかけて遺存する。残存長7.8cm、範被幅0.6cm、範被厚0.6cmである。18は刀子で、身中央から茎部にかけて遺存する。残存長7.2cm（身部長3.5cm・茎部長3.7cm）である。19は刀子の茎の部分で、残存長4.8cmである。

SI009（第31～33図、図版2-1, 6-2, 7-1, 13～15）

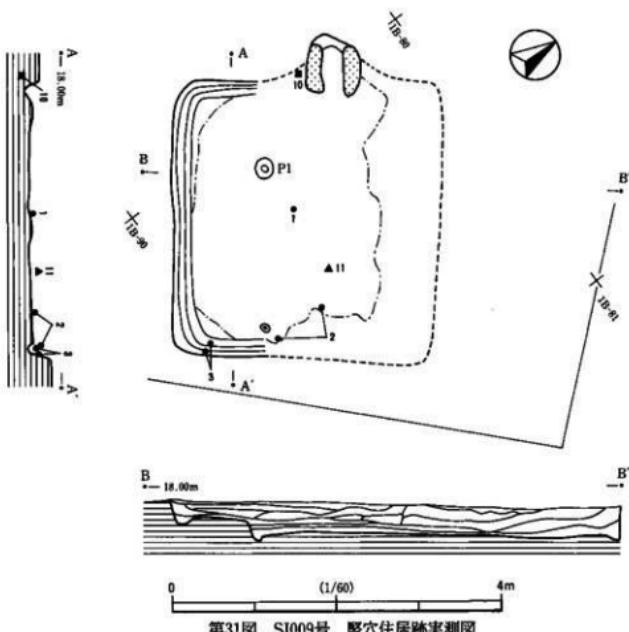
位置・形状

本調査区の1B-80に位置し、SI008の南西部部分を切っている。本遺構は、プラン検出の際、切り合い関係が確認できず、本遺構の北側から東側までの半分の床面と壁を検出することができなかった。検出できなかつた東側の壁はセクション図からおこし、平面図に波線で推定ラインを復元した。平面形態は方形で、長軸（推定）4.20m、短軸（推定）3.24m、床面積（推定）11.20m²、住居方位N-49.5°-Wである。確認面から床面までの深さは、最大深19.8cm、最小深10.2cmである。壁溝は検出できなかつた部分を除けば全周する。床面の硬化面は広範囲に確認された。カマドはSI008の南西部部分を利用し、山砂はあまり使用せず暗褐色土によってカマドの本体を作っている。カマド中央上部には甕を2個のせてあったが、上部の擾乱のため遺存状態はあまり良くない。柱穴は1基（P 1）が検出され、深さはP 1 = 29.1cmである。

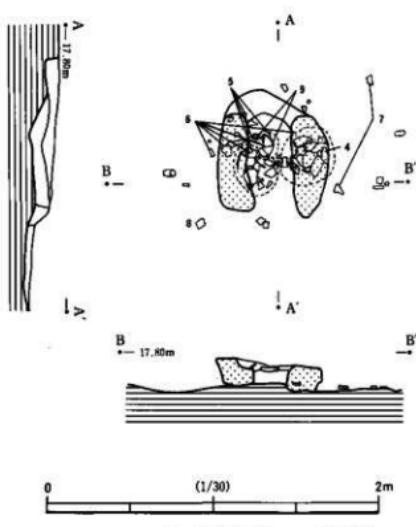
出土遺物

覆土中から出土した遺物は比較的少なく、カマド内出土の土器片が大半を占める。また、SI008と床面積の半分以上を重複しているため、両遺構間で接合する土器が多く見られる。図示できた遺物は、須恵器の杯1点、高台付杯1点、土師器の杯1点、甕5点、台付甕1点、敲石1点、鐵器1点の計11点である。

1, 2は須恵器である。1は杯で、口縁部から底部の一部までの1/3の破片である。復元口径12.8cm、復元底径7.5cm、器高3.5cm、胎土は密で焼成も良好である。体部の纏繩成形痕が見られ、内面には回転ナデが施される。内外面には焼成時の火燐が見られる。2は高台付杯で、口縁部から高台までの1/2ほど復元できた。復元口径11.8cm、器高5.0cm、復元底径10.0cm、器台高1.0cm、胎土は白色針状物質を微量含んでいるが密で焼成も良好である。体部の纏繩成形痕が見られ、内外面には、回転ナデが施される。底部外面は回転糸切りの後、高台が貼り付けられ、接合部分には丁寧な回転ナデが施される。3は土師器の杯で、ほぼ完形に近い状態まで復元できた。口径11.2cm、底径8.1cm、器高4.1cm、胎土は密で焼成も良好である。



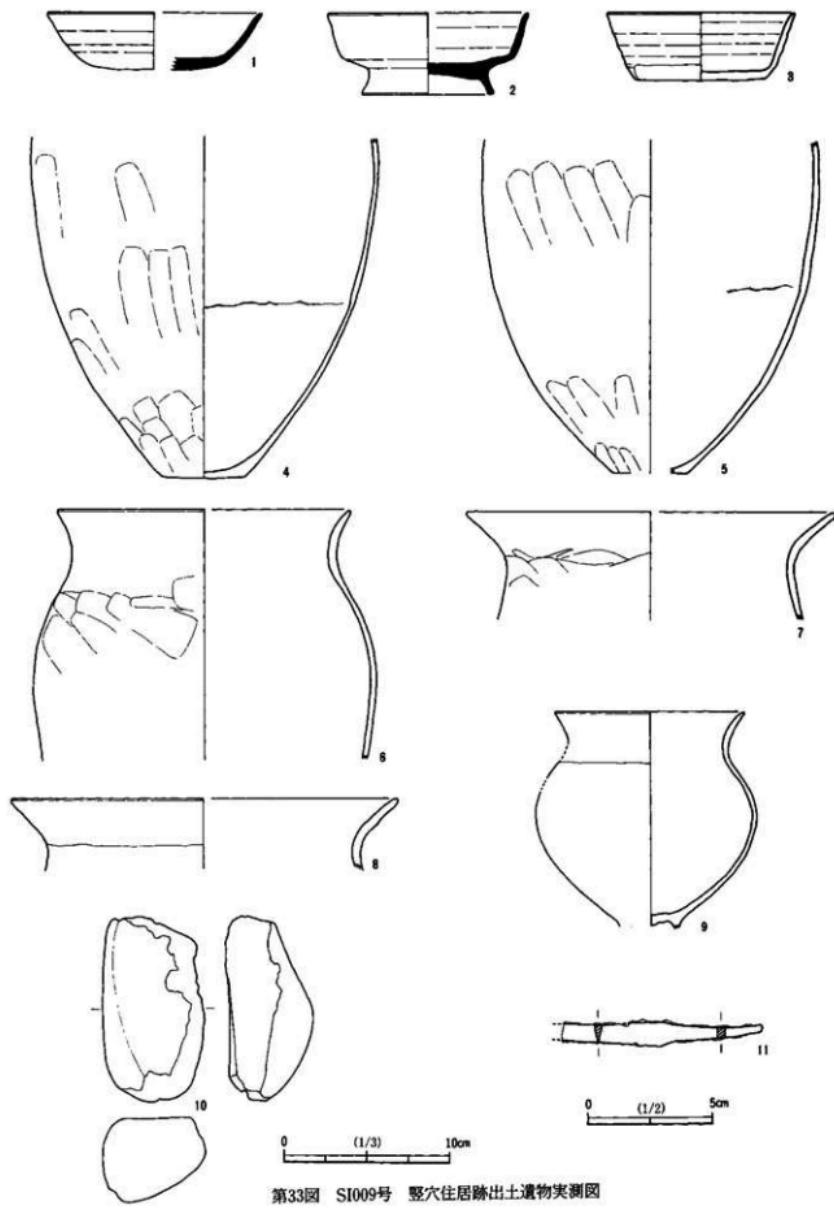
第31図 SI009号 竖穴住居跡実測図



第32図 SI009号 竖穴住居跡カマド実測図

外内面は丁寧な回転ナデが施される。底部外
面は回転糸切りの後、外周を手持ちヘラケズ
リする。

4～8は土師器の甕である。4は底部から
部中位までの1/3ほど復元できた。底径5cm、
器壁は薄く、胎土は密で焼成も良好である。
外面は縦位のヘラケズリが施され、煤が厚く
付着し、色調は黒褐色を呈す。内面はナデが
施され、一部輪積み痕が残る。5は底部の一
部から胴部中位までの1/4ほど復元できた。復
元底径4.4cm、胎土は密で焼成も良好である。
外面はやや斜位のヘラケズリが施され、広範
圍に煤が付着している。内面はナデが施され、
一部輪積み痕が残る。6は口縁部から胴部中
位までの1/5ほど復元できた。復元口径17.5
cm、胎土はやや砂粒が多く色調は若干赤味が
かっており、焼成は良好である。内外面とも



第33図 SI009号 積穴住居跡出土遺物実測図

に摩耗が激しく、外面の一部に斜位のヘラケズリが見られるのみである。7はSI008出土の土器片と遺構間接合し、口縁部から胴部の一部まで復元できた。復元口径22.0cm、胎土はやや砂粒が多く色調は若干赤味がかったりが密で、焼成も良好である。外面はヘラケズリの後、ナデが施され、内面はナデが施される。8はSI008出土の土器片と遺構間接合し、口縁部のみ復元できた。復元口径23.3cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともにナデが施される。

9は土師器の小型台付壺で、台部の一部を欠損する以外は、ほぼ完形に近い状態まで復元できた。口径11.4cm、最大径は胴部中位にあり13.3cmである。胎土は砂粒が多く焼成は良好である。内外面ともに摩耗が激しく、調整技法は不明である。

10は敲石で、部分的に欠損しているが、この部分が使用された敲打面である。残存長11.0cm、最大幅6.0cm、最大厚5.0cmである。石材は砂岩である。

11は本遺構一括出土の鉄製刀子で、身先端部分を欠損する。残存長8.1cm（身部長4.5cm・茎部長3.6cm）である。

SI010（第34、35図、図版2-1、4-2）

位置・形状

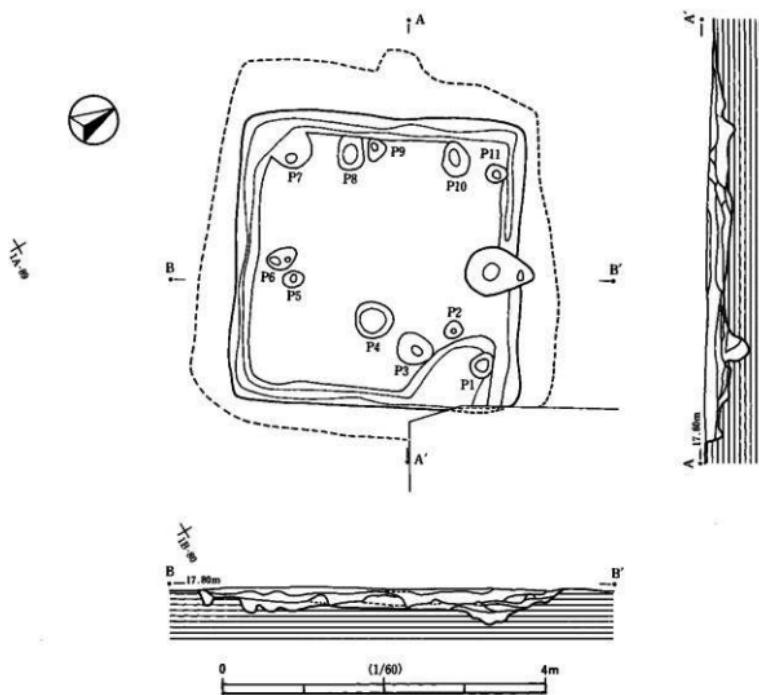
本遺跡全体からすると北側の1A-79に位置し、SI003に建て替える以前の住居跡である。つまり本遺構の壁を周囲50cmほど拡張して、SI003に建て替えている。SI003の床面からの深さは非常に浅く、最大深12.0cm、最小深2.0cm、床面積11.22m²である。この落込みは、SI003建て替え時に全面貼床される。本遺構の平面形態は方形で、規模は長軸3.68m、短軸3.52m、住居方位はN-35'-Eである。壁溝は部分的に巡り、カマド右袖部分から壁にかけて未検出である。床面は比較的平らである。カマドは建て替えの際に完全に破壊され、火床部の窪みがわずかに検出されたのみである。ピットは11基検出されたが、柱穴として考えられるのは3基（P1、P7、P11）で、P1=47.5cm、P7=35.3cm、P11=35.8cmである。梯子ピットと考えられるのは2基（P5、P6）で、P5=10.0cm、P6=22.3cmである。その他のピットは6基（P2、P3、P4、P8、P9、P10）で、P2=11.2cm、P3=42.1cm、P4=19.2cm、P8=7.9cm、P9=14.4cm、P10=27.6cmである。

出土遺物

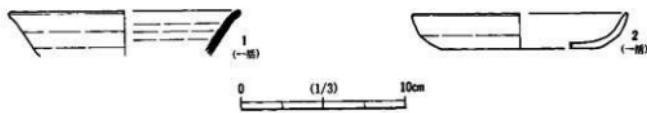
出土遺物は非常に少なく、図示できた遺物は2点のみである。

1は本遺構一括出土の須恵器の杯で、口縁部を1/5ほど復元できた。復元口径13.7cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともに回転ヘラケズリの後、回転ナデが施される。

2は本遺構一括出土の土師器の杯で、口縁部から底部の一部まで復元できた。復元口径12.9cm、復元底径9.6cm、器高2.1cm、胎土は密で焼成も良好である。内外面ともに丁寧なナデが施され、底部の外周は手持ちヘラケズリが施される。



第34図 SI010号 壺穴住居跡実測図



第35図 SI010号 壺穴住居跡出土遺物実測図

4 土坑

SK001 (第36図、図版 7-2)

位置・形状

調査区南側の2A-48に位置する。平面形態は円形を呈し、径1.10m、最大深41.1cm、最小深32.7cm、面積0.42m²である。しっかりした掘込みで、底面は多少の起伏はあるがほぼ平らである。覆土は細かなローム粒を含み、しまりはある。

出土遺物

覆土内からは細かな土器片が10点出土したが、図示することはできなかった。いずれも平安時代の土器片である。

SK002 (第36図、図版 7-3)

位置・形状

SI007の南西側の2A-32に位置し、東側半分に擾乱を受けている。平面形態は梢円形を呈し、長軸0.82m、短軸0.62m、最大深43.5cm、最小深40.0cm、面積0.07m²である。長軸方向はN-33°Eである。覆土は小粒のローム粒を多量に含み、しまりはある。覆土の土層からすると、掘立柱建物跡の柱穴の可能性もある。

出土遺物

覆土内からは土器片が数点出土したが、いずれも小片で図示することはできなかった。

SK003 (第36、37図、図版 2-1, 8-1)

位置・形状

重複するSI004とSI005の西側の1B-60に位置する。平面形態はきれいに整形された円形を呈し、径0.93m、最大深31.5cm、最小深22.3cm、面積0.47m²である。底面は若干の起伏がある。覆土は中粒のローム粒を多量に含み、しまりはある。

出土遺物

覆土内からは土器片が数点出土し、図示できた遺物は1点である。

1は本遺構一括出土の土師器で、高杯の杯部の破片である。欠損した脚部の突起部を削り、皿として再利用している。内外面は丁寧なナデが施され、内面は赤彩される。杯部は回転糸切りの後、脚部を貼り付け外周を丁寧にナデる。また、内外面には墨書のような黒ずみがわずかにみられるが、ほんの一部分しか遺存していないので、墨書かどうかは不明である。

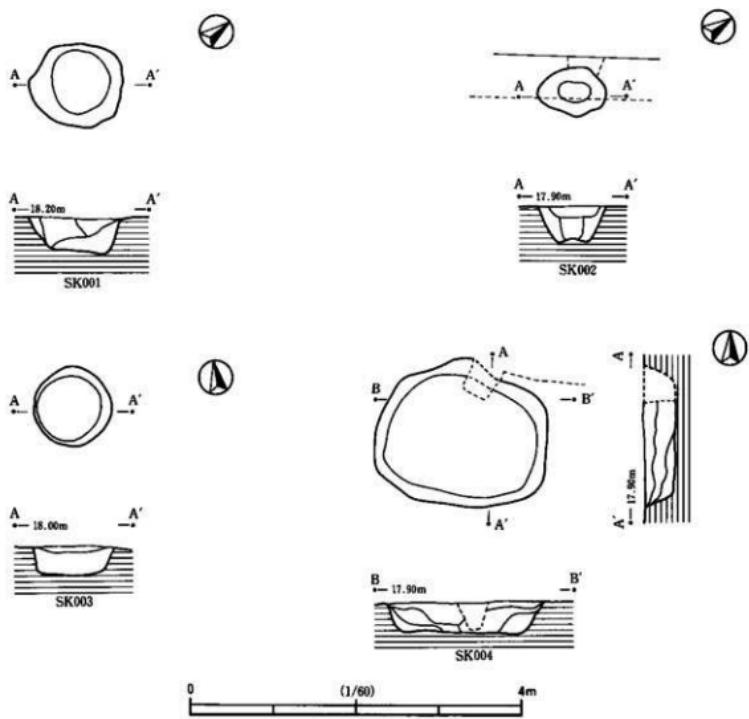
SK004 (第36図、図版 2-1, 8-2)

位置・形状

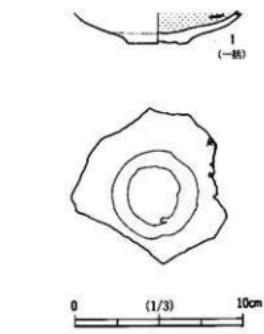
SK003の北西側の1A-69に位置する。平面形態は不正長方形を呈し、長軸2.06m、短軸1.74m、最大深37.3cm、最小深29.4cm、面積2.07m²である。底面は若干の起伏があるが、ほぼ平らに整形されている。覆土は細かいローム粒を多量に含み、しまりはある。

出土遺物

覆土内からは土器片が数点出土し、いずれも小片で、図示できなかった。



第36図 SK001・002・003・004号 土坑実測図



第37図 SK003号 土坑出土遺物実測図

5 一括出土遺物（第38図、図版13, 14）

本項では、表採及び、確認調査時に設定したトレンチ覆土内から出土した遺物で、図示できたものを紹介する。計12点である。

1はかわらけの小皿で、3トレンチ出土である。4/5まで復元でき、口径10.8cm、底径5.0cm、器高2.7cm、歪みが大きい。胎土は砂粒が多いが密で焼成も良好で、内面全体と外面の底部外周まで赤彩が施される。内外面ともに丁寧なナデが施され、底部外面は回転糸切りの後、外周にナデが施される。

2は土師器の杯で、4トレンチ出土である。底部の破片で外面には墨書があるが、小片のため文字は不明である。復元底径7.0cm、胎土は密で焼成も良好である。外面は回転ヘラケズリが施され、内面は丁寧なナデが施される。

3はおはじき状の土製品で、3トレンチ出土である。完形品で、最大長1.5cm、最大厚0.5cm、両面には指紋が付く。色調は部分的に黒褐色を呈し、全面に黒色処理が施されていたのが、部分的に剝離したようである。

4は管玉の土製品で、6トレンチ出土である。完形品で、径1.2cm、孔径0.4cm、厚1.4cm、重量は1.76gである。全面に赤彩が施される。

5は輕石で、8トレンチ出土である。

6は須恵器の高台付杯で、6トレンチ出土である。高台部分の破片で、復元標径11.5cm、器台高0.5cmである。胎土は密で焼成も良好である。底部外面は回転ヘラ切りの後、高台を貼り付け、外周部分には丁寧な回転ナデが施される。

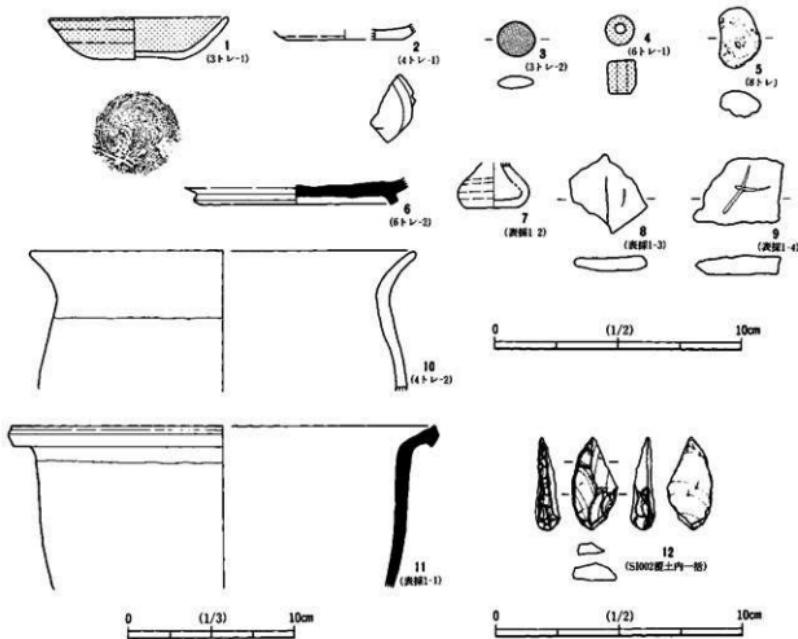
7は表採された陶製の遺物で、用途不明である。色調は灰白色で、最大径2.9cm、残存高1.8cmである。外面は回転ナデが施され、底面は手持ちヘラケズリが施される。

8、9は表採された線刻土器片で、焼成前に線刻されている。8は比較的浅い線刻が2本見られる。小片であるため土器の器形は不明である。9は8よりも若干深く幅広の線刻で、2本が直行する。8同様、土器の器形は不明である。

10は土師器の甕の口縁部から胴部上位までの破片で、4トレンチ出土である。復元口径23.2cm、胎土は砂粒が多く表面がややざらつくが、焼成は良好である。内外面ともに摩耗が激しく、調整技法は不明である。

11は表採された須恵器で、甕の口縁部から胴部上位までの破片である。復元口径25.7cm、胎土は密で焼成も良好である。口縁部の内外面は回転ヘラケズリの後、丁寧な回転ナデが施され、胴部外面は叩きが施される。

12はSI002の覆土内から出土したナイフ形石器である。流紋岩製の剥片を素材とし、素材剥片の打面側を基部とし、打面及び打痕付近は除去される。主に腹面側からプランティングが施され、一部左側縁の基部付近に背面からの調整が認められる。器長3.74cm、器幅1.82cm、器厚1.01cm、重量は5.31gである。SI002の覆土内からの出土のため、産出層準は不明である。



第38図 一括出土遺物実測図

III ま と め

1 検出遺構について（第6図）

本遺跡から検出された遺構は、竪穴住居跡10軒、土坑4基である。調査区域内の半分以上は近年の擾乱を受けていたため、各遺構の上面は削平され、完全な状態で遺構を検出することはできなかった。また、竪穴住居跡については重複関係も比較的多く、遺物の本来の帰属遺構に関しては細心の注意をはらった。

先にも触れたが、遺構の覆土中には擾乱、重複による流れ込みの遺物も見られ、同一遺構内出土の土器で、図示できた土器も時期的にまとまりがないものもある。また、遺構の時期細分ができる状況の土器の点数も少なく、遺構の時期区分は大まかな区分を用いらざるを得ない遺構もある。このような状況を踏まえ、本遺跡で検出された遺構の時期区分の機軸については、カマド内、床面出土の土器に限定した。また、時期区分の基準を満たすことができない遺構に関しては、重複関係、形態を加味して大まかな時期別を用いることとした。

SI001号竪穴住居跡は、墨書き土器が2点出土しているが、いずれも破片のため内容については不明である。時期区分はカマド内出土の甕と床面出土の須恵器から判断すると、8世紀中葉に比定することができる。

SI002号竪穴住居跡は、図示できるような遺物が少ないため、細かな時期区分はできないが、床面出土土器から判断すると、9世紀前葉から9世紀後葉に比定することができる。

SI003号竪穴住居跡の覆土内出土遺物は時期差が大きく、多くの流れ込みがあることがわかる（第15図参照）。覆土最下層出土の須恵器から判断すると、10世紀代以降に比定することができる。また、SI003号竪穴住居跡は、SI010号竪穴住居跡の拡張、建替住居跡である。

SI004号竪穴住居跡は、遺物量が極端に少なく、しかも図示できた土器も2点のみなので帰属する時期は不明である。しかし、SI001号竪穴住居跡を切っているところから、8世紀中葉以降の時期とすることができる。

SI005号竪穴住居跡は、図示できた土器が2点と遺物が著しく少なく、帰属する時期は不明である。しかし、SI010号竪穴住居跡が本跡を切り、SI004号竪穴住居跡を本跡が切っていることから、細かな時期区分はできないが、（旧）SI001 → SI004 → SI005 → SI010 → SI003（新）という新旧関係が成立つ。つまり、本遺跡北側の竪穴住居跡5軒は上記の順に、8世紀中葉から10世紀代にかけて重複、建て替えが行われたとすることができる。

本遺跡南西側のSI006号竪穴住居跡とSI007号竪穴住居跡の2軒については、出土遺物の量も、図示できた土器も比較的多い。また、擾乱は受けているが他の住居跡に比べれば破壊は少なかった。そのためか、遺構及び遺物の遺存状態は比較的良好である。

SI006号竪穴住居跡は、半分以上が未掘区にあるためカマドの検出はできなかったが、床面出土の土器から判断すると、8世紀中葉から8世紀後葉に比定することができる。

SI007号竪穴住居跡は、遺構上面は削平されてはいるものの、本遺跡検出の遺構の中では一番多くの遺物が図示できた。カマド内及び床面出土の土器から判断すると、SI006号竪穴住居跡と同一時期と思われる。

SI008号竪穴住居跡はSI009号竪穴住居跡に切られ、カマド内及び床面出土の土器から判断すると、8世

紀中葉に比定することができる。

SI009号竪穴住居跡は、擾乱による多少の流れ込みの遺物が見られるが、カマド内及び床面出土の土器から判断すると、9世紀前葉から9世紀中葉に比定することができる。

SK001・002・003・004号の4基の土坑のうち、覆土内出土で図示できた遺物はSK003号土坑一括出土の土師器のみである。4基の覆土内から出土した土器片は小片で量も少ないがすべて一括で取り上げた。その多くは8世紀後葉から9世紀後葉に比定できる土器片であった。

上記のように大まかな時期区分しかできなかったが、東中山台遺跡群における本地点の集落構成がいとなまれていた時期は、8世紀中葉から10世紀代以降の間に比定できる¹⁾。

2 出土遺物について

遺構から出土した遺物は出土量が比較的少なく、しかも小片が多い。本遺跡で出土したすべての土器を見ると、8世紀代から10世紀代にかけての土器片が大部分を占める。

本報告書では、小さな破片でも図示可能な遺物は極力掲載した。遺構内出土遺物及び遺構外一括遺物も含めると、本報告書掲載点数は158点になる。当然図示できなかった遺物の方がはるかに多いが、取り上げた遺物全体からみると、須恵器と鉄製品の点数の多いことが、本遺跡の大きな特徴として上げることができる。

本報告書に掲載した遺物の点数158点中、土器は土師器が74点、須恵器が35点である。ほぼ2対1の割合で土師器と須恵器が使用されていたことがわかる。土師器の機種別点数をみると、壺40点、杯24点、高台付杯2点、高杯1点、台付甕1点、甑1点、皿1点、器台1点、器形不明3点で壺が半分以上である。特に甕については完形のものは少ないが、形態的には長胴で口縁部が大きく左右に広がり、内面はナデ、外面は多方向のヘラケズリによって薄い器壁に仕上げられ、底部が小さいタイプの甕が目立つ。このタイプの甕はいわゆる武藏型の甕で、武藏を中心に広く関東地方に流通している。本遺跡出土の甕では、形態、調整、胎土からして以下の甕がこのタイプに当たると思われる。SI001の10~12、SI002の13、SI007の24、26、27、SI008の7、SI009の4、5、7、8で、計12点である。本遺跡出土の甕だけでもみるとこのタイプの甕は、ほぼ3割を越える。また、図示できなかった甕の破片の中にもこのタイプと思われるものが多くみられた。須恵器の器種別点数をみると、杯17点、高台付杯8点、蓋3点、甕3点、盤2点、壺1点、高杯1点で、杯が圧倒的に多いことがわかる。須恵器の杯は、体部の輪轂形成痕が明瞭で、口縁部が外反して立ち上がるタイプが目立つ。また、底部の調整も、切り離し後回転ヘラケズリ調整するものや、多方向の手持ちヘラケズリ調整するもの、さらに体部下端部をヘラケズリするものなどが確認された。これらの特徴を持つ須恵器の杯を生産する窯跡は県内においてもみられ²⁾、焼成・胎土も共通する点が多いので、県内で生産されたものと考えられる。

本遺跡出土の遺物でもう一つ注目されるものに、鉄製品が上げられる。鉄製品は計34点出土しており、その内訳は、刀子13点、釘9点、鎌4点、鎌2点、手鎌1点、耳環1点、不明4点である。本遺跡出土の鉄製品のうち刀子、釘の多さについて注目したい。刀子は大刀に比べて身の短い、長さ30cm以下の短刀のことを言うが、武器として用いられたほかに、日常の用にも使われていた³⁾。また、釘は木製品などの接合に使用され、鉗は板の平面をととのえ細部を作る木工具である。これらの工具類が比較的多いことは、本遺跡の性格を明らかにする一つの手がかりとなるかも知れない。

その他の遺物としては、軽石 3 点、かわらけの小皿 2 点、布目瓦片、土製品（切り子玉、おはじき状土製品、管玉）、陶製品が各 1 点ずつ出土している。また、墨書き土器 3 点、線刻土器片 2 点も出土している。

上記のような出土遺物の傾向は、本遺跡周辺の遺跡でも共通して認められている。また、奈良・平安時代の貝塚が周辺に多く確認されていることも、本遺跡を理解するうえで重要であろう。

3　まとめ（第 3、4 図）

ここまででは本遺跡の特徴を遺構と遺物からみてきたが、ここでは周辺の遺跡との関連から本遺跡を見ていくこととする。

今回の調査地点は面積約 450,000m²もある本遺跡群（東中山台遺跡群）に含まれ、すぐ北側部分では本郷台遺跡第 1 次・2 次・3 次の調査が実施され、その成果は既に報告されている⁴。本郷台遺跡も本遺跡群に含まれ、今までに 7 回の調査が行われている。奈良時代から平安時代、中世を中心とする竪穴住居跡、掘立柱建物跡、製鉄関連工房跡、道路跡、火葬墓、土坑墓、方形竪穴状遺構などが検出されている。特に本遺跡に近接する本郷台遺跡の第 1 次調査では、8、9 世紀を中心とした竪穴住居跡 16 軒、9 世紀中葉の竪穴住居跡に切られる形で 15 棟の掘立柱建物跡が集中して検出されている。その他にも奈良時代の木棺墓 1 基、土坑墓 4 基、火葬墓 3 基、馬葬壙 1 基、溝状遺構 4 条が検出されている。また、2 次調査では 1 次調査と同様の時期の竪穴住居跡 17 軒、掘立柱建物跡 2 棟、小竪穴 4 基、火葬墓 2 基、溝状遺構 3 条が検出されている。遺物としては、多量の土器が出土し、墨書き土器が特に多く、東海産の須恵器、灰釉陶器なども確認されている。また、鉄製品も多く、本遺跡群の大きな特徴とことができる。

この本郷台遺跡は、旧葛飾町本郷に所在し、栗原本郷とも呼ばれ、「倭名類聚抄」に記してある「下總国葛飾郡栗原郷」に比定されている。また、8、9 世紀を中心とした遺構・遺物が大量に発見されたことから、栗原郷の中心地とされている⁵。

一方、「2 遺跡の位置と環境」で記載したとおり、本遺跡から谷を隔てた東側台地上には印内台遺跡群が所在する。この印内台遺跡群全体の面積は約 687,500m²あり、現在までに 28 地点約 70,700m²が調査されている⁶。これまでに検出された遺構は、古墳時代後期・奈良時代・平安時代の竪穴住居跡約 400 軒、奈良・平安時代の掘立柱建物跡、鍛冶関連遺構、土坑墓、馬葬墓、横穴墓、溝状遺構、道路跡などがある。竪穴住居跡は奈良・平安時代に比定されるものが最も多く、古墳時代後期は少ない。印内台遺跡群の集落の出現は 7 世紀初頭とされ、7 世紀後葉に徐々に発展期に入り、8、9 世紀には隆盛期を迎える。そして、住居跡数の増減はあるものの 11 世紀まで続き、中世を迎えるとされている。中世の遺構としては、火葬墓、土坑墓、掘立柱建物跡、地下式壙などが検出されている。遺物としては多量の土器が出土したことが報告されている。土師器は在地のものに加え北武藏型・畿内型も出土していて、須恵器は東海産・常陸産のものも確認されている。また、墨書き土器や鉄製品もかなりの点数出土しており、印内台遺跡群の特色の一つである⁷。

今回の調査地点では、本郷台遺跡第 1 次・2 次・3 次の調査報告や周辺遺跡の調査例から比べれば墨書き土器は少なく、土器の搬入品が土師器の裏には認められるものの、須恵器については東海産や常陸産のものが確認できなかった点で、若干様相が異なる。しかし、鉄製品の出土が計 34 点と多く、なかでも工具類が比較的多いことなど、共通点もある。今回の調査では、この地域の奈良・平安時代の集落の一端を垣間見たにすぎず、本遺跡の性格や集落の実態を明らかにすることはできなかったが、本遺跡が本郷台遺跡に

近接していることなどを含めると、本遺跡は本郷台遺跡との関連性を抜きにしては語れないと考える。また周辺遺跡の調査例からも、同様な時期の住居跡が多数検出されており、本遺跡を含めた周辺地域は奈良・平安時代を中心とし、その後も集落の状況や立地は次第に変化しながら中世へと展開していったと考えられる⁹⁾。

- 注1 遺構の時期区分については、床面及びカマド内出土の土器に限定した。また、判定できる遺物がない遺構に関しては、遺構の切り合い関係から大まかな時期区分を行った。尚、時期区分を行うに当たって下記の論考と周辺の発掘調査報告書を参考にした。
房総歴史考古学研究会 1987『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究 第1集
古代の土器研究会 森 郁夫 1996『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東4 煮炊具－』古代の土器研究会 第4回シンポジウム
古代生産史研究会 1997『東国須恵器－関東地方における歴史時代須恵器の系譜－』古代生産史研究会 '97シンポジウム
- 2 郷壠英司他 1993『生産遺跡の研究－須恵器－』千葉県文化財センター研究紀要14
- 3 日本考古学協会 藤田亮策 1987『日本考古学辞典』
- 4 岡崎文喜他 1980『本郷台』本郷台遺跡発掘調査団
岡崎文喜他 1983『本郷台II』－奈良・平安時代を中心とした集落址の調査－船橋市遺跡調査会・本郷台遺跡第二次調査団
- 5 高橋源一郎他 1959『船橋市史前編』船橋市役所
栗原薰子・道上 文 1998『千葉県の歴史』資料編 考古3（奈良・平安時代）「129本郷台遺跡」財団法人千葉県史料研究財団
- 6 道上 文 1998『発掘された船橋の遺跡－近年の調査成果展－』平成10年度小企画展パンフレット船橋市郷土資料館
- 7 栗本佳弘他 1973『小金線－印内遺跡1・2・3地点－』財団法人千葉県都市公社
石井 穂他 1980『印内台 古墳・奈良・平安時代の集落址、墓址の発掘調査概報』印内台遺跡調査団
船橋市教育委員会 1991『印内台遺跡－第4次調査報告書－』新明和エンジニアリング株式会社船橋市遺跡調査会
道上 文・栗原薰子 1998『千葉県の歴史』資料編 考古3（奈良・平安時代）「128印内台遺跡」財団法人千葉県史料研究財団
- 8 天下井 恵他 1994『古代の船橋』『船橋市総合教育センター研究収録第5集』船橋市総合教育センター

写 真 図 版



周辺地形航空写真



1. 遺跡北側完掘状況（南西から）



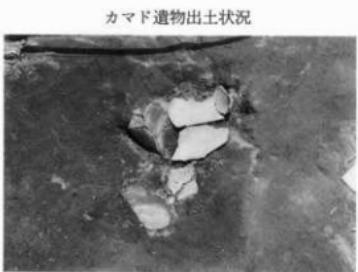
2. 遺跡南西側完掘状況（南東から）



1. SI001号竪穴住居跡
遺物出土状況（南から）



2. SI001号竪穴住居跡
完掘（南西から）



カマド遺物出土状況



3. SI002号竪穴住居跡
遺物出土状況（西から）



1. SI003・SI010号竪穴住居跡
遺物出土状況（北西から）



2. SI003・SI010号竪穴住居跡
完掘（北西から）



3. SI004・SI005号竪穴住居跡
完掘（北西から）



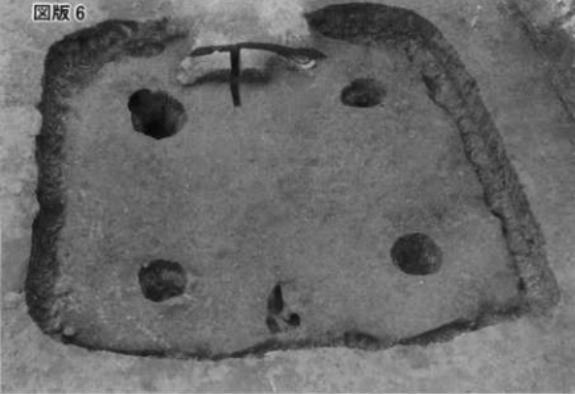
1. SI006号竪穴住居跡
遺物出土状況（南東から）



2. SI006号竪穴住居跡
完掘（南から）



3. SI007号竪穴住居跡
遺物出土状況（南東から）



1. SI007号竪穴住居跡
完掘（南東から）

カマド完掘



2. SI008・SI009号竪穴住居跡
遺物出土状況（南西から）

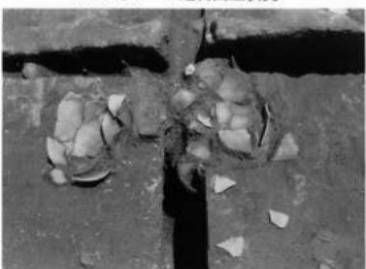


3. SI008号竪穴住居跡
完掘（南東から）

1. SI008・SI009号竪穴住居跡
完掘（南西から）



SI008号カマド遺物出土状況



2. SK001号土坑完掘（北東から）



3. SK002号土坑完掘（南から）





1. SK003号土坑
完掘 (北から)



2. SI004号土坑
完掘 (北から)



SI001_1



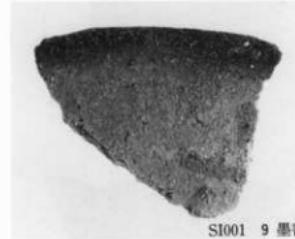
SI001_8 墨書



SI001_12



SI001_2



SI001_9 墨書



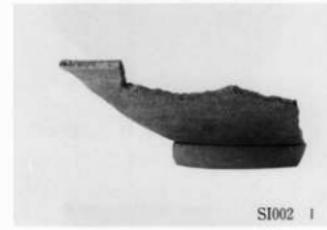
SI001_13



SI001_3



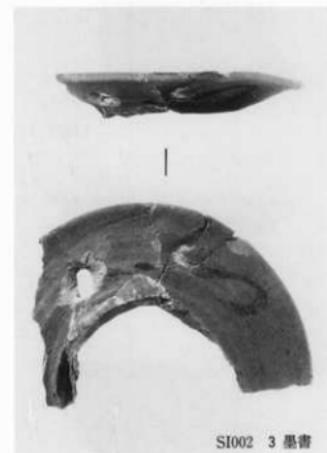
SI001_10



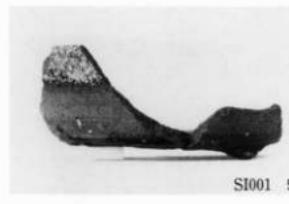
SI002_1



SI001_4



SI002_3 墨書



SI001_5



SI001_6

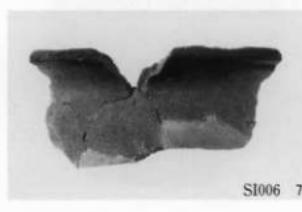
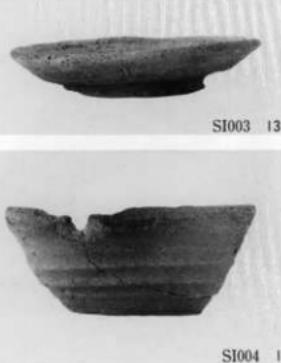
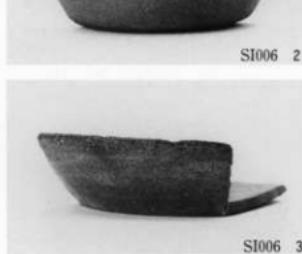
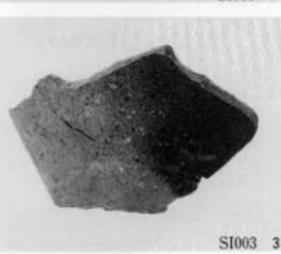
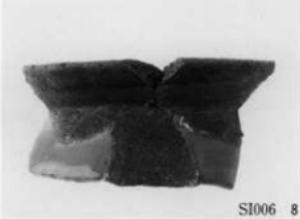


SI001_11



SI001_7





SI003・SI004・SI005・SI006出土遺物



SI006 12



SI007 6



SI007 7



SI007 1



SI007 1



SI007 2



SI007 8



SI007 3



SI007 9



SI007 4



SI007 10



SI007 5



SI007 11



SI007 12



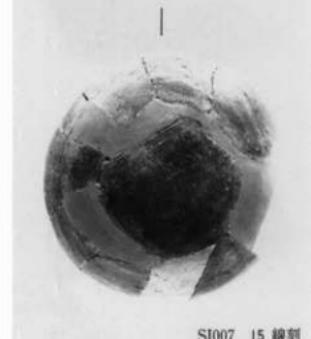
SI007 13



SI007 14



SI007 14



SI007 15 線刻



SI007 16



SI007・SI008出土遺物

(一括出土遺物)



SI008 15



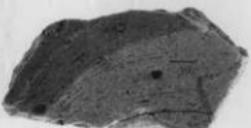
SI009 5



3トレンチ 1



SI008 16



4トレンチ 2 墨書



SI009 1



SI009 6



3トレンチ 3 布目瓦



SI009 2



SI009 7



SI001 14



SI009 3



SI009 9



SI009 4



SI007 38

(敲石)



(石皿)



(軽石)



一括出土遺物 5

(ナイフ形石器)

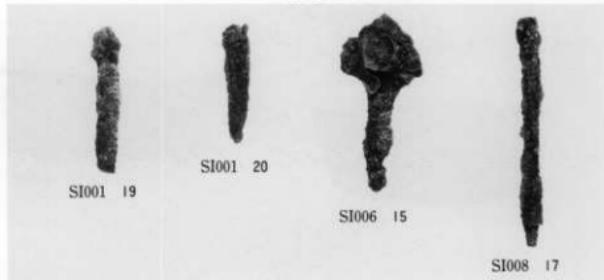


一括出土遺物 4

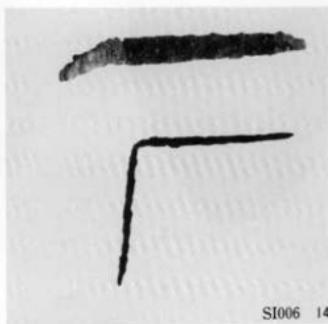
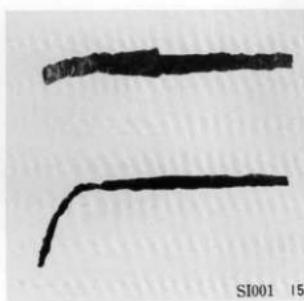
(土製品)



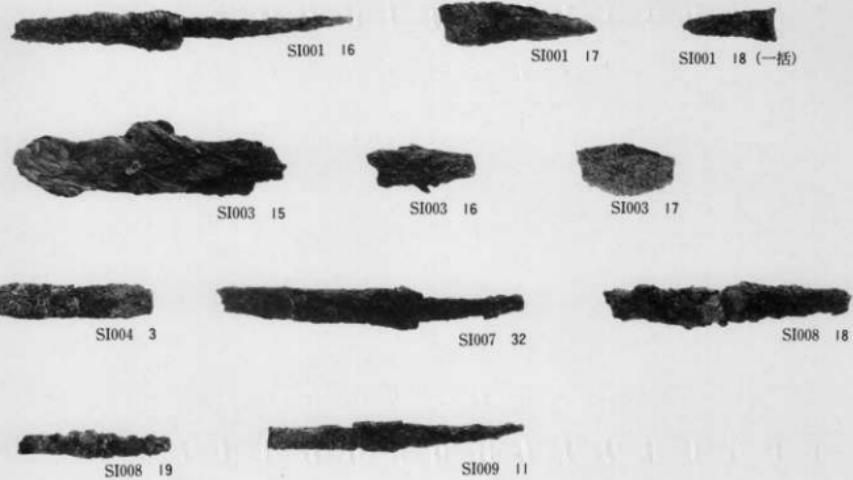
(鉄繩)



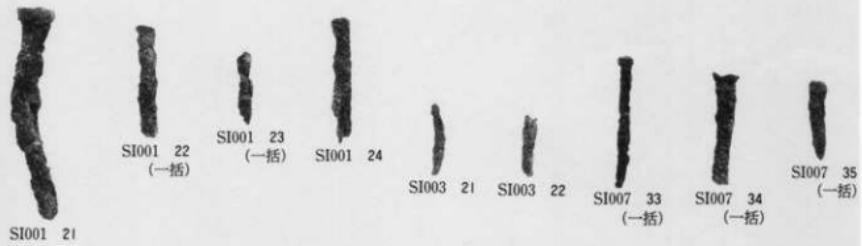
(刀子①)



(刀子②)



(釘)



(鍔)



(不明)



報告書抄録

ふりがな	ふなばししひがしなかやまだいいせきぐんだい14じょうきでん
書名	船橋市東中山台遺跡群第14次調査地点
副書名	県単耐震橋梁緊急架換事業埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第377集
編著者名	岸本雅人
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 ☎043-422-8811
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわなかやまだい 東中山台 いせきぐん 遺跡群第 14次調査 地点	ふなばし しにしみな 船橋市西船6丁 73番の1ほか	12204	011	35度 42分 39秒	139度 57分 31秒	19980408 ~ 19980529	700	県道松戸原 木線耐震橋 梁緊急架換 事業に伴う 埋蔵文化財 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東中山台 遺跡群第 14次調査 地点	集落跡	旧石器時代		ナイフ形石器	
		奈良時代	竪穴住居跡 4軒	土師器、須恵器 土製品、石製品 鉄製品	しもうさこくかつしかぐんくらはらごう 下總国葛飾郡栗原郷 に比定されている。
		平安時代	竪穴住居跡 6軒 土坑 4基		

千葉県文化財センター調査報告書第377集
船橋市東中山台遺跡群第14次調査地点
県単耐震橋梁緊急架換事業埋蔵文化財調査報告書

平成12年3月31日

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千葉県土木部
千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町2-5-5
